

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



学术交流提携記念公開展示報告	
モダン都市京城の巡礼 鍾路・本町	2
2011年度第1回公開研究会報告	
京城の都市・建築そして生活	6
2011年度第2回公開研究会報告	
国際シンポジウム「都市新媒体と近代上海」(都市のニューメディアと近代上海)	10
研究調査報告	
「日本近世生活絵引」南島編纂共同研究 八重山蔵元絵師画稿	得能壽美 16
海外神社跡地から見た景観の持続と変容 旧満洲国国都新京(長春)の海外神社跡地調査	津田良樹 18
水辺の生活環境史 汽水域の漁撈 一涸沼のスマキー	安室 知 20
研究エッセイ	
ことばのひびき ～言語処理の音韻的側面	松澤和光 22
招聘レポート	
外国だが身近に感じる国	Bruno Hissatugu 24
日本初の風刺雑誌—横浜の「名物」	Sonja Hotwagner 25
現代日本における寄席芸術の伝承に関する考察	祝 鵬程 26
日本のお守りの魅力	Josef Antonius Kyburz 27
中国における日本映画の伝播と受容	康 楽 29
崇鳳習俗の日中比較	趙李 娜 30
横浜の英字新聞は「台湾出兵」をどのように報道したか	
—「Japan Punch」と「Japan Weekly Mail」を中心として—	轟 友 軍 31
近代前期に日本に渡った韓国女性の足跡を探して	徐 智瑛 32
派遣レポート	
帰国した華僑・留日学生が語った戦後初期における在日中国人留学生組織の結成	
—東京を中心に—	田 遠 33
近・現代化に伴う中国杭州の食生活変化の断面	李 徳雨 34
カナダの多元文化及び日系人の移民	于 洋 35
戦後ドイツにおけるモンゴル学研究	白 莉 莉 36
ワルター・ハイシッヒとヘルマン・コンスタンの功績を追い求めて	
海外提携機関紹介	
漢陽大学校東アジア文化研究所	38
ブックレット紹介	39
書評	
琉球王国の自画像—近世沖繩思想史	屋良健一郎 40
■2012年度センター研究員・研究協力者	41
■2012年度個人研究課題・2012年度奨励研究者決定・派遣研究者決定(6月末現在)	42
■主な研究活動	43
■Information	44

漢陽大学校東アジア文化研究所・神奈川大学非文字資料研究センター

学術交流提携記念 公開展示

モダン都市京城の巡礼 鍾路・本町

期 間：2011 年 12 月 13 日（火）～ 17 日（土） 10:00-17:00

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 16 号館 2 階 ホワイエ



「モダン都市京城の巡礼 鍾路・本町展」を観て

金 容範（非文字資料研究センター研究員）

このたび、本神奈川大学非文字資料研究センターは、2011 年 12 月 16 日、韓国ソウルの漢陽大学校東アジア文化研究所と学術交流を提携することになった。その記念として、同日に、「京城の都市・建築そして生活」の公開研究会が催され、また、両研究所の調印式に先立って「モダン都市京城の巡礼 鍾路・本町」（以下、京城巡礼展）の展覧会が、5 日間、神奈川大学の横浜キャンパスで開催された。

京城巡礼展は、漢陽大学建築学科の富井正憲と韓東洙、両教授を主とした「ソウル近代都市建築研究会」が主催したもので、歴史地図や絵はがき、建築図面、映像などの様々な非文字資料を用い、近代都市へ変貌したソウルの 1930 年代の姿を捕捉した、貴重な展示であったのである。

京城巡礼展は、今回の展覧会で 3 回目の展示となった。2011 年 3 月にソウル市清溪川文化館での 3 ヶ月の展示（展示名：「京城 1930」）を始め、同年 10 月には駐日韓国大使館東京文化院で 2 回目の展示を行い、韓国の学者や研究者らには高評価をいただき、また京城で生まれ育った人々にとっては懐かしい思い出を呼び起こすものとなったのは間違いない。

ここでは、京城巡礼展について、今回の展示物と内容を紹介し、そのうち、近代京城の建築が描かれた絵はがきを取り上げ、韓国近代建築の研究における絵はがきの

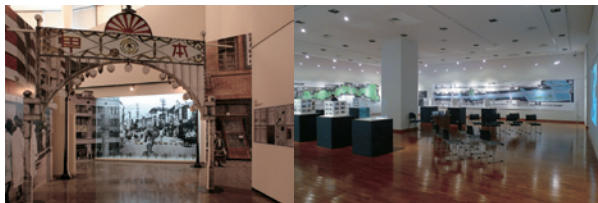


図 1 左側はソウル市清溪川文化館での「京城 1930」の巡回展示場、右側は駐日韓国大使館東京文化院での展示場



図 2 神奈川大学横浜キャンパスでの学術交流提携記念の展示場

非文字資料としての重要性に改めて注目したい。

京城巡礼展の内容と特色

京城巡礼展は、近代京城の都市空間の主軸を成していた鍾路と本町、2 つの通りに展開された商店街を復元している。80 余年前の商店街の町並みと、そこに建てられた建築を復元するために、富井教授の研究会は、非文字資料と文字資料を合わせて集めた膨大な資料に関して綿密な分析を行い、その成果がようやく展覧会を通じて公開されたのである。そのうち、今回の展覧会に展示されたものとしては、次のものが挙げられる。

- ① 1930 年代の鍾路商店街の復元地図（縮尺 1/300）
- ② 1930 年代の本町商店街の復元地図（縮尺 1/300）

- ③ 鍾路・本町・黄金町の都市景観と建築、朝鮮風俗が描かれた絵はがき 80 余点
- ④ 「朝鮮博覧会図絵」の鳥瞰図（吉田初三郎作、1929）
- ⑤ 京城精密地図と交通案内図
- ⑥ 京城案内パンフレットや案内書
- ⑦ 「京城」フィルム（清水宏監督、朝鮮総督府鉄道局、1939）
- ⑧ 鍾路と本町に建てられた代表的な建物の図面と説明書、商店街の立面図
- ⑨ 復元作業過程の資料と発表論文、出版物

このような展示物のうち、最も注目すべきは、鍾路と本町の復元地図である。復元地図は、富井教授が 25 年前に入手した「京城地形明細図」（1927）と「京城府管内地籍目録」（1917）から作られた市街図がベースとなり、各商店の位置と土地所有者、地価などの詳しい情報を明らかにするために、地番入り地図はもちろん、当時の電話番号帳、商工名録、商店街調査資料、写真帖などの新たな資料を入手、すべてのデータを比較・検討しながら、一つ一つの商店に関するチェックを行ってきたという。また、商店街に建ち並んだ建物の情報に関しては、主に「朝鮮建築会」の機関誌『朝鮮と建築』から集めた図面などのデータを用いている。

また、もう一つの注目すべき展示物としては、展示場で流された清水宏監督の「京城」映像資料が挙げられる。「京城」は、京城を訪れた旅行客の視線から、当時の京城市内の姿を撮影したものであり、今までの京城関係の資料にはあまり見られなかった、非常に貴重なビジュアルな資料が公開されたのである。この映像は、1939 年に朝鮮総督府鉄道局の宣伝物として発表されたもので、官公庁や百貨店、ホテルなどの大規模な建物を始め、商店街のショーウィンドウや露店、劇場、動物園、ゴルフ場など、主に娯楽施設や昼夜の繁華街の風景が映し出され、京城観光を広報するために作られたのがよく分かる。この映像が流された時、日本人と朝鮮人が混ざった人々の群れが三越や京城駅のプラットホームに夥しく集まっていた光景が強く印象に残っている。さらに、「ソウル近代都市建築研究会」が、この映像に映ったシーンの経路そのままに撮影したソウルの現代版の映像も目を引いた。



図 3 フランス語で発行された 1900 年代の絵はがき「ソウルの街 (Une rue de Seoul)」(권혁희, 2011)

近代朝鮮における絵はがきの始まり

こうした展覧会の内容のうち、近代京城の様々な建物を描いた絵はがきに注目してみる。まずは、近代朝鮮の絵はがきと観光業を扱った先行の発表資料*から、近代朝鮮における絵はがきの始まりに関する内容を紹介しておきたい。

* 권혁희 (2011.3)、「論考－日帝時期の観光記念の絵はがきと京城の視覚的再現」、『異邦人の瞬間捕捉、京城 1930』、清溪川文化館、pp.224-234（韓国語）/ 여환진 (2008.10)、「韓国建築歴史学会学術発表会－建築学の資料としての近代絵葉書について」、『建築歴史研究』、17 巻 5 号、pp.106-119（韓国語）

葉書というものは、1869 年からドイツ通信省を始めとしてヨーロッパの各国へ拡がっており、日本では 1873 年から発行されたという説がある。今回の展覧会に見られたように、写真を入れた絵はがきは、1891 年にフランスのマルセーユで発行されたことがあり、1894 年には、郵便局から切手を貼って使用できる、いわゆる現在の郵便葉書のような絵はがきがイギリスで発行され始めた。そして、1874 年に設立された万国郵便連合 (Universal Postal Union) が、1906 年の総会で国際郵便に関する技術標準を制定し、絵はがきの発行が飛躍的に増えたという。

朝鮮は 1900 年に万国郵便連合に加入したが、実際に絵はがきがいつから発行したのかは明確に知られていない。ただ、発表資料の著者の意見によると、1900 年頃、朝鮮を訪れたフランス人教師アレバーク (Aleveque) が約 40 点の絵はがきを販売したことがあり、また、『皇城新聞』の紙面には、1901 年 12 月に「玉川堂」写真館から風俗画が描かれた絵はがきを発売した記録が載せられ

ていたという。すなわち、近代朝鮮における絵はがきは、1900 年から登場したと考えるに差し支えない。

1900 年代の初頭から 1920 年以前まで発行された朝鮮の絵はがきの多くは、朝鮮人の服飾と生活、職場、伝統の儀礼などの風俗に関わったものであったが、こういった絵はがきの中に描かれた都市景観と建築は、風俗の一部として表れたものが多い。しかし、1910 年を前後にして植民地時代が始まり、京城の都市化が進められながら、近代的な都市景観と建築が絵はがきのテーマとして注目されるようになったという。なかには、1910 年代の中盤から幹線道路が整備されて電車が走っている市街地の姿や、その周辺に建ち並んだ近代的な建物が新たな視覚的な素材として表れている。さらに、1929 年の朝鮮博覧会をきっかけに朝鮮の観光業が急成長し、こうした都市景観と建築の絵はがきは、京城だけでなく、鉄道と港湾建設とともに浮上した朝鮮半島の振興都市と観光地を中心とし、より活発に作られたのである。

絵はがきに描かれた鐘路と本町の町並みと建築

今回の展覧会には、このように発行された絵はがきのうち、近代京城を代表する鐘路と本町の町並みと、そこに建ち並んでいた建物が描かれた絵はがきが集中的に展示されていた。

鐘路と本町は、京城市内の東部を東西に横断する幹線道路で、現在は 1980 年代に地下鉄の完工とともに再開発された乙支路（旧、黄金町）があるが、鐘路と本町（現、忠武路）は、いまだに漢江以北のソウル市内を貫く幹線道路としてその機能を持続しており、ソウル市内の栄えた繁華街である。植民地時代の鐘路と本町は、それぞれ朝鮮人の北村と日本人の南村を代表する繁華街となり、



図 4 京城市街地計画令が公布された 1936 年に発行された「京城精密地図」。鐘路と本町の通りが都心の東西を結んで、そのまんなかに清溪川と黄金町通りがある

2 つの通りの間に流れる清溪川によって両民族の住居地が南北に分けているように、その通りの形成過程や性格が異なっていた。

鐘路は、朝鮮王朝時代の遷都（1394）の当初から最も幅広い大路として計画され、御用商人の店の「六矣塵」（ユギジョン）が集まって朝鮮時代の独占的な商権を持つ商店街として発展した通りであった。しかし、今回の展覧会に公開された鐘路の町並みには、路上に電柱が立ち並び電車が走っていた、既に朝鮮総督府によって市街地整備が行われた近代的な景観が見られる。

一方、本町は、最初から日本人の商店街として現ソウルの忠武路 1・2 街を中心に形成された通りである。本町の以前に、雨が降ると道がよくぬかるんだことから、「ジンコゲ（‘泥濘’の意味）」と称されたこの通りが日本人の町として造られたのは、1885 年頃にジンコゲの周辺、南山の北側の麓に日本公使館が建って日本人らが公使館を中心に集まって住み始めたことからであった。さらに、日清戦争（1894.6 ～ 1895.4）以後から統監部時代を渡って、朝鮮に渡来した日本人の人口が増加しながら日本人村も次々成長し、本町は、こうした日本人村の拡大とともに、日本人商人らの町へ発展し、1930 年代に至ると、京城の都市文化を推し進めた最大の繁華街になったのである。

このように 1930 年代の京城の姿が描かれた絵はがき



図 5 市街地整備前の朝鮮人町と市街地整備後の鐘路の都市景観
左ー「(京 149) 京城朝鮮人町」、右ー「(京城名所) 鐘路の盛観」



図 6 1930 年代の本町の都市景観（「The Centre of Education and Politics at Kolea, Keijo」）



図 7 京城に建てられた古典主義様式の近代建築
左から、朝鮮銀行本店（辰野金吾設計、1912）ー「(京城名所) 最も広き朝鮮銀行前」、京城郵便局（設計者不明、1915）ー「(朝鮮・京城風景) 京城郵便局の全景」、京城駅（塚本靖設計、1925）ー「(京城) 美しい京城停車場」、朝鮮ホテル（ゲオルグ・デ・ラランデ設計、1914）ー「(朝鮮名所) 京城朝鮮ホテル」



図 8 京城三越（1930）ー「百貨の殿堂ー京城・三越」と京城府民館（1935）ー「京城府民館」



図 9 「朝鮮博覧会ー光化門より会場を望む」



図 10 パゴダ公園と昌慶苑などにみられる折衷式の朝鮮近代建築
左から、「(京城) パゴダ公園蠟石塔」、「(京 19) (朝鮮名所) 京城昌慶宮御苑博物館」、「(京 30) (朝鮮名所) 京城昌慶苑 図書館」

の中で、建築を絞って見ると、京城市内の最も中心であり本町の入口になる「鮮銀前」広場は、朝鮮銀行本店と京城郵便局、三越などの優れた建物によって取り囲まれており、京城駅、朝鮮（鉄道）ホテル、京城府民館などの、古典主義の様式からモダニズムに至るまで様々な建築を作り出した京城の近代的な建築美が目を引いている。こうした建築群の発祥には、日本近代建築の先駆者で知られていた辰野金吾と彼の教え子である塚本靖、朝鮮総督府新庁舎を設計したドイツ人ゲオルグ・デ・ラランデ（Georg De Lalande）など、日本人や欧米人建築家らが活躍したと伝えられている。

また、絵はがきに描かれた朝鮮の古建築については、公園や遊園地、博覧会場などの娯楽施設が目立っていたのが注目される。例えば、1929 年の市政 20 周年記念の博覧会場になった景福宮や、鐘路 3 丁目のパゴダ（Pagoda）公園内の石塔、春の花見や外出の名所であった昌慶苑に建てられた図書館と博物館など、朝鮮建築の伝統美を活かした折衷式の近代的な建物が、先述の近代建築に劣らず、各地に建てられていたのが分かる。これらの朝鮮の伝統色を帯びていた折衷式の建築については、設計者、施工者、建築様式や技術などに関する詳しい分析とともに、韓国の近代建築研究における新たな課題であると考えられる。

近代朝鮮の絵はがきのアーカイブ構築へ

このように、近代朝鮮における絵はがきの発行が盛んに行われたが、こうした絵はがきを扱っている近代京城の都市文化と生活に関する研究は、さらに進める必要がある。また、近年、様々な個人コレクターや韓国の公共機関によって多くの絵はがきが収集されているが、それを体系的に活用することができるアーカイブの構築が急を要することを指摘したい。まさしく、今回、神奈川大学・漢陽大学の両研究所の提携記念として催した「京城の巡礼」展覧会の成果が、韓国における絵はがきを含めた非文字資料に関する再認識の促進と、それに基づいたアーカイブの開発、さらに、日韓両国の研究交流の足場を築く契機になると、期待している。

2011 年度 非文字資料研究センター 第 1 回公開研究会

京城の都市・建築そして生活

期 間：日時：2011 年 12 月 16 日（金） 13:00 ～ 16:30

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 16 号館地下 1 階 視聴覚 B 室

報 告：富井正憲（漢陽大学校工学大学 建築学部 教授）

車 惠英（漢陽大学校国際文化大学 韓国語文学科 教授）

金 容範（神奈川大学工学研究所 客員研究員）

コメンテーター：

朴 賛勝（漢陽大学校人文大学 史学科 教授）

吳 秀卿（漢陽大学校東アジア文化研究所長）

大里浩秋（神奈川大学外国語学部 教授）

はじめに

2011 年 12 月に韓国・漢陽大学校東アジア文化研究所と本神奈川大学非文字資料研究センターとの部局間による学術交流の提携が結ばれた。これを記念して 2011 年 3 月にソウル市清溪川文化館および同年 10 月に駐日韓国大使館東京文化院で開催された展覧会「モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町」を、短期間ではあったが、本学でも開催した。

韓国と日本は、戦前期の不幸な関係があり、これまで韓国内では戦前期の様々な植民地政策に関連する都市文化研究を行うことは難しく、とりわけ、当時の日本人らの評価を伴う分析やその公表はいまだ多くの抵抗が見られる。こうした中で、漢陽大学校建築学部韓東洙氏・富井正憲氏の両先生を中心とした研究会の研究成果による本展覧会は、当時のソウルを代表する繁華街として日本人の南村（ナムチョン）の本町と韓国人の北村（ブッチョン）の鐘路（チョンノ）という 2 つの街並みを復元し、その魅力的な都市・京城の様相を蘇らせた画期的なものであった。この展覧会は、韓国で、ソウルを「京城」と表記した初めてのもののでもあり、その内容は、まさしく、今後の日韓の新しい研究関係の構築の必要性を示すのにもふさわしいものであった。

この注目すべき展覧会の開催期間中の 12 月 16 日に、その内容を受け「京城の都市・建築そして生活」と題して 2011 年度神奈川大学非文字資料研究センター第 1 回

公開研究会を開催した。パネラーは、漢陽大学校側から富井正憲氏（漢陽大学校工学大学建築学部教授）、車惠英氏（漢陽大学校国際文化大学韓国語文学科教授）の 2 名と神奈川大学側から金容範氏（神奈川大学工学研究所客員研究員）の 3 名の諸先生にお願いし、併せて、漢陽大学校側から朴賛勝氏（漢陽大学校人文大学史学科教授）、吳秀卿氏（漢陽大学校東アジア文化研究所長）および神奈川大学側から大里浩秋氏（神奈川大学非文字研究資料センター副センター長）の 3 名の諸先生にコメンテーターとしての参加をお願いした。研究会は、内田青蔵（非文字資料研究センター研究員）の司会により、神奈川大学非文字資料研究センター長田上繁氏の挨拶から始まり、パネラー並びにコメンテーターの魅力的な発表が続き、参加者も大いに満足したものであったと思われる。本稿は、この研究会の概要である。



公開研究会の様子

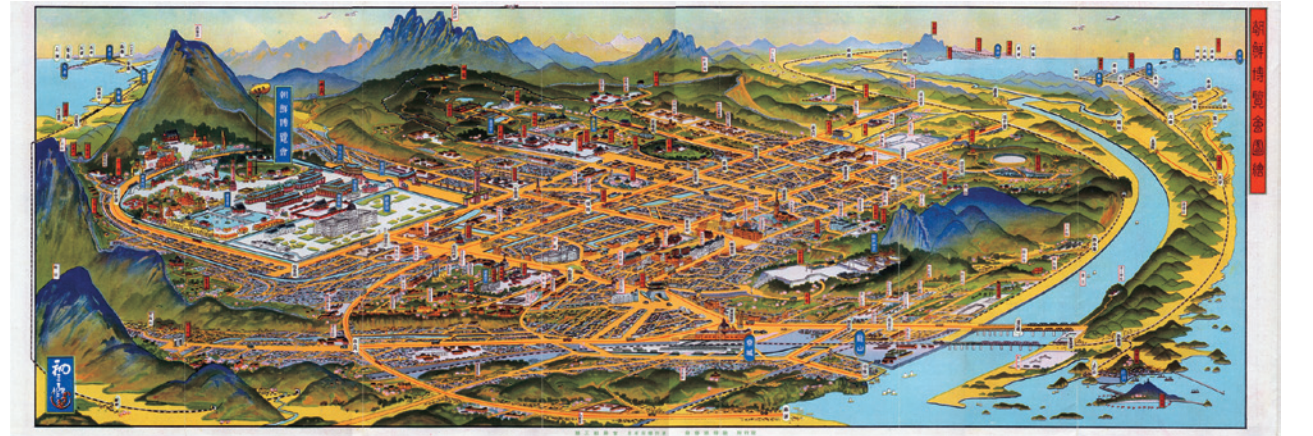


図 1 1929 年の吉田初三郎の描いた鳥瞰図

富井正憲氏による「モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町」について

最初のパネラーである富井正憲氏は、今回の学術交流の提携を記念して行った展覧会「モダン都市京城の巡礼 鐘路・本町」の担当者であり、展示品の収集・分析も担当されている。そこで、そうした作業過程を含め、展覧会の内容の紹介を通して、1930 年代の京城の都市と建築について報告された。

富井氏は、作家梶山季之の『京城昭和十一年』を読み、詳しい地図があれば京城という都市をより深く理解できると、1930 年代のソウル研究を開始した動機を述べている。今回の展覧会は、特徴として、①「京城」という言葉を冠した初めての日韓両国の重要な展覧会であること、② 1930 年代の一般市民の都市生活と文化に焦点を据えていること、③「比較」をキーワードとし、市民と観光客による人間比較、「鐘路」と「本町」による朝鮮人商店街と日本人商店街の空間比較、1940 年の「京城」フィルムによる現代との時間比較、④地図・図面・映像などによるビジュアルな展示構成、の 4 点が挙げられるという。こうした特徴を端的に示すひとつが、1929 年の吉田初三郎の描いた鳥瞰図である（図 1）。吉田初三郎は、そこに近代的な都市・京城をダイナミックに描いている。これは、1929 年 9 月に開始された朝鮮博覧会の様子を描いたもので、内地からの見学者、あるいは朝鮮半島の地方都市からの見学者たちが、この地図を片手に京城を探索したのだという。朝鮮総督府は、朝鮮神宮、総督府庁舎、京城府庁舎そして京城駅を完成させ、いわゆる植民地時代的主要建築と都市インフラを完成させていた。そのため 1930 年代は、そうしたインフラをもとに、

多くの人々が京城に集中し、都市生活そのものも大いに発展した時期と捉えることができるという。

展覧会で展示された最大の成果物は「鐘路」と「本町」の復元地図である。この地図には、韓国人の“銀座”と日本人の“銀座”とも称された 2 つの通りの両側に、どのような店舗が並んでいたのかを詳細に明らかにしており、当時の繁華街の風景が復元されている。その復元は、様々な資料の収集と分析の結果であるという。すなわち、地番入りの地積図がないため、1917 年・1927 年発行の「京城府管内地積目録」、「京城地形明細図」を基本に、街路・街区図を作製し、京城の歴史書・案内書・便覧などから各街区の利用状況・土地所有者・価格などを、同様に、電話番号帳、商工名録、絵葉書あるいは広告などを用いて街路の商業構成と商店街地図を作製した。その結果、鐘路通りでは 1439 件、本町の新町通りでは 1725 件の商店の商号・氏名・国籍・業種・地番などの入ったデータベースができ、それをもとに繁華街が復元されているのである。建築に関しては、朝鮮建築会の機関誌『朝鮮と建築』（1922 － 1945 年）を主資料としている。そして、作製した復元地図は、「京城日の出会」（日の出小学校同窓会）などの京城で幼年期を過ごした人々の記憶をもとにチェックを受けるなどの修正を行い、完成したものである。

また、会場におかれたスクリーンを通して 1939 年に製作された清水宏監督「京城」（松竹株式会社所蔵）が流された。当時の京城の都市と人々の姿が映された「京城」は、貴重な都市文化研究の非文字史料でもあり、今後のこうした映像資料の分析はもちろんのこと、他の都市との比較研究などの可能性も指摘された。いずれにせよ、展覧会を通して紹介された京城の都市と建築の研究

は、ようやく開始されたばかりであり、今後、都市や建築の研究者はもとより、映画、文学、経済などの他分野の研究者も含め、様々な豊かな研究へと発展することを期待したい、として報告を終えた。

車恵英氏による雑誌『別乾坤』に描かれた「京城」について

車恵英教授は、最初にこれまでの植民地の近代都市「京城」と韓国の近代性に関する研究の観点について整理し、これまであまり重視されてこなかった観点としての「当時のソウルに生きていた人々が認識したソウルと、その表象とは何か」をテーマとして報告された。

史料として用いた雑誌『別乾坤』は、1926年から1934年まで刊行された雑誌で、その発行目的は、いわゆる民族独立・国権回復の啓蒙をめざしたものではなく、軽い読み物を提供した新しい雑誌であったという。すなわち、この雑誌が発行された1926年は、前年の治安維持法による思想統制及び言論統制が強化された時期でもあった。一方、この時期は、新しい都市インフラとしての朝鮮神宮や京城駅が竣工し、また、朝鮮博覧会の開催とともに日本資本の三越などの百貨店が進出し、ショッピングや映画・カフェなどの魅力的な娯楽性の高い都市文化が持ち込まれた時期でもあった。こうした光と影の両方が持ち込まれた時代の中で、雑誌『別乾坤』は、京城の歴史、植民地前後の変化の様相、京城の表と裏、長所と短所、生産と退廃などを俯瞰し、そうした都市全体のありのままの姿を探索し記録するために京城特集を展開していたという。そこには、リアリズムとしての京城の全体像を捉えようとする姿勢が顕著に表れていた、として報告を終えた。

金容範氏による「近代京城の生活」について

金容範氏は、近代都市住宅として出現した都市韓屋（ハノク）を取り上げ、その建設背景と平面構成の特徴、生活の様子について報告された。

都市韓屋は、「都市型韓屋」、「改良韓屋」、「近代韓屋」、あるいは「ジッチャンサジプ（商人の建売住宅）」と称され、それぞれの名称が、この都市韓屋の特性を端的に示しているという。すなわち、「都市型韓屋」は都市部に建つというその立地を示しており、「改良韓屋」はその建物が伝統に基づきつつ新たな機能や生活に則して改良されたものであることを示している。また、「近代韓屋」は、近代という新時代に建てられた建物であること

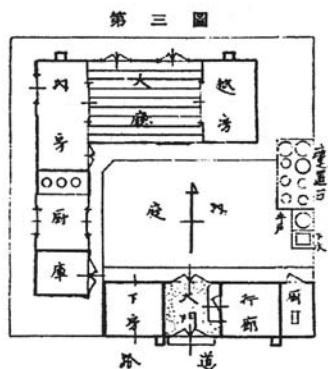


図2 建築家朴吉龍のスケッチに見られる京城の都市韓屋の平面形式（『朝鮮と建築』1941年4月号）

を示し、「ジッチャンサジプ」はその供給者が中小規模の住宅会社の業者の造るものであることを示しているという。

京城では、都市韓屋は1920年代に出現した。現在の都市韓屋の保存地区として知られる北村（ブッチョン）は、かつては王族らの両班（ヤンバン）と高級官僚らの住宅地であったが、1910年代から行われた市街地整備と1930年代の「朝鮮市街地計画令」により嘉会洞（カヘイドン）などの高級住宅地の細分化が一層進められ、都心部の高級住宅地は次々と中小規模の都市韓屋用に変貌していったという。都市韓屋は、不特定の居住者に対応できるように、釜屋（台所・ブオク）、内房（アンバン）、大庁（板の間・テーチョン）、越房（コンノンバン）からなるL字型の内棟（アンチェ）と大門間（ムンカンバン）と便所などからなる一字型の門間棟（ムンカンチェ）の2棟が内庭（アンマダン）を取り囲むようにコの字型に配されるのが一般的であった（図2）。この動線的にもホールのようなでもあり、台所と連続した多目的な家事空間でもある内庭を中心とする配置は、韓国の伝統的な住み方を維持しようとする意識の表れであり、その形式は京畿道（キョングド）地方の民家に類似しているという。

各部屋の使われ方は、内房は夫婦寝室で、寒い季節は家族の食事・団らん・親戚のもてなしにも使われた最も格の高い広い部屋で、ほとんどの生活がこの部屋を中心に行われた。越房は、子供室や若夫婦の寝室として使われた。また、暖かい季節には、板の間の大庁が内房の機能の代わりに場として使われた。ただ、都市韓屋では、本来、開放されていた大庁の内庭側にはガラスを用いた建具が入るなど室内化され、また、洋家具も配されるなど生活の近代化が進められていたという。こうした都市韓屋は、戦後になると、釜屋（台所）の床上化、そして

LDKへと進み、また、内房の個室化、内庭の室内化など、西欧のライフスタイルの導入の中で変貌を遂げていることを指摘し、報告を終えた。

3名のコメントについて

3名のパネラーの報告後に、朴賛勝氏、吳秀卿氏および大里浩秋氏の3名にコメントを頂いた。

朴賛勝氏は、3名の発表に対する直接的な質問ではなく、歴史学者の立場から植民地時代の京城の見方について、簡潔に報告された。すなわち、1920年代から30年代の京城は植民地朝鮮の首都であり、日本の植民地支配の政治的中心地として変貌を遂げていた。その姿を見る時、この植民都市として基本的な性格を常に意識して考えるべきであるという。つまり、京城が見せている近代性は、植民地としての近代性であり、日本人が企画・演出し、朝鮮人を観客とする芝居のようなものといえ、日本を通じて入ってきた日本的な近代性の影響が強いものであるといえる。それは、植民地本土の文化が、植民地にどのように移植されていくのかをよく示す事例ともいえる。そうした京城の見方があることを指摘された。

吳秀卿氏は、現在、芸術劇場として再利用されている、当時の本町に建てられた映画館である明治座に注目され、その利用の経緯を通して、近代と現代を継続的に見る視点について報告された。すなわち、1934年に竣工した明治座は、3層構成からなるバロック様式の建物で、戦後は国際劇場と改名され映画館として利用され続け、その後ソウル市の施設となり、1961年からは国立劇場に改名された。ただ、植民地時代の建物を国立劇場として使うことに対する批判があり、1975年には民間に売却され金融会社として使われてきた。その後、文化人たちがこの建物の重要性を主張し、再び2003年に文化的観光的立場からの再利用が決定し、明洞芸術劇場として内部はリモデリングされ、今日に至っているという。歴史の反省と思い入れによりリニューアルされた明洞芸術劇場を通し、記憶を遡ることは未来へと向かう望みを持っていること、を指摘された。

最後の大里浩秋氏は、コメンテーターとして、いくつかの質問と感想を述べられた。すなわち、富井氏については、上海や天津などの日本人町と京城との違い、また、提示された京城の様子が、具体的に1930年代の内容を示しているのか、あるいは、戦前期の京城全体の様子を示しているのか、時間の経過での変化があるならば1930年代の京城の特徴はどのようなものであったのか、

と質問された。これに対して富井氏は、植民地としての京城と租界として上海とは大きく異なるものであるとし、具体的には、朝鮮王国の首都の上に、植民地時代のレイヤーが重なり、その上に現代のレイヤーが重なっているのがソウルであるのに対し、上海などの中国の日本人町は、新しい部分として造られた町という違いがあること、また、京城の復元では基本的には1927年に都市計画を進める際に行われた調査資料を基本史料としていることを答えられた。

車氏に関しては、扱った雑誌『別乾坤』と他の雑誌との内容の違いについての質問と、また、中国でも日本の侵略期の雑誌や新聞の誌面の変化は意味ある研究となるかもしれないという感想を述べられた。これを受け車氏は、雑誌『別乾坤』が特別な雑誌で、当時の京城の全体像を把握しようとする試みは、この雑誌だけの傾向であったと答えられた。

金氏に関しては、京城に住んでいた日本人の住まいの様子についての質問が出された。金氏は、植民地時代初期の日本人は、材料をすべて日本から持ち込んで住宅を建てて住んでいたが、冬の寒さが厳しく、その後はオンドルの導入などの改良が行われ、また、様式的には本土で流行していた洋風住宅が主流となっていく傾向が認められると答えられた。

（内田 青蔵 非文字資料研究センター研究員）



左列：上から 富井正憲氏、金 容範氏、吳 秀卿氏
右列：上から 車 恵英氏、朴 賛勝氏、大里浩秋氏

2011 年度 非文字資料研究センター 第2回公開研究会

国際シンポジウム 「都市新媒体与近代上海」（都市のニューメディアと近代上海）

日 時：2012 年 2 月 25 日（土）～ 26 日（日）
会 場：中国 上海師範大学

「都市のニューメディアと近代上海」

孫安石（非文字資料研究センター研究員）

非文字資料研究センターの「租界とメディア」研究班による 2011 年度・第 2 回公開研究会（以下、上海会議と略称する）が 2012 年 2 月 25 日と 26 日の 2 日間にわたり上海師範大学城市文化研究所にて開催された。この上海会議の開催の詳細とプログラムについてはすでに城山拓也氏により『東方』第 375 号（2012 年 5 月、東方書店）に「学会レポート」（本誌転掲の記事を参照）として紹介されているので、ここでは今回の上海会議の開催にいたるまでの簡単な経緯と城山氏が取り上げなかった報告のなかから個人的に興味をもった報告と近年の上海都市研究の動きについて若干、紹介しておきたい。

戦前の東アジア各国に設定されていた租界研究をテーマに掲げた非文字資料研究センターの「租界とメディア」研究班の公開研究会は、2008 年度の上海会議（News Letter『非文字資料研究』、第 22 号）、2009 年度のソウル会議（News Letter『非文字資料研究』、第 23 号）、2010 年の横浜会議（News Letter『非文字資料研究』、第 25 号の関連記事）と一巡しているから、今回の上海会議は二巡目に入ったことになる。当初、神奈川大学が上海（中国）、横浜（日本）、ソウル（韓国）での巡回会議を提案した理由は、経済発展の著しい中国、韓国が会議の運営に関わる経費を分担してもらいたいという目論みがあったことも事実であるが、いまになってみれば、東アジア 3 国の国際シンポジウムを巡回して開催することの意義は財政の面に留まるものではなかったことに新たに気付かされる。即ち、各都市での開催は当地の若手研究者と意見を交換し、お互いの見識を刺激しあう貴重な交流の場であることは日増しに確認されているからで



図 1 「上海城市社会生活史叢書」の一部

ある。今後、このような巡回会議は学術・研究分野において大いに活用されることを期待したい。

ところで、東アジアの租界と都市研究に関連したここ 4 年間の最も大きな変化は、中国側の都市研究、中でも上海研究の充実ぶりにあるように思われる。1990 年代の中国近現代史研究が欧米の Public Sphere（公共空間）やハーバマスなどの欧米の研究手法にもろに影響されていたとすれば、いまの中国の研究者は、名実ともに自前の研究手法を語り始めているように感じられるからである。

例えば、上海の各大学（華東師範大学、復旦大学、上海師範大学など）や学術研究団体（上海社会科学院歴史研究所、上海市檔案館など）では大型の都市研究プロジェクトが次々と立ち上がり、その研究成果の集大成として「上海城市社会生活史叢書」の第 1 期（12 冊）がすでに刊行を終え、第 2 期（14 冊）の計画が進んでおり、中国側の刮目すべき勢いを感じることができる。このよう



写真 1 上海会議の様様



写真 2 上海会議の開幕挨拶を終えて。大里浩秋教授（神奈川大学、左）と楊剣龍教授（上海師範大学、右）

な勢いを感じさせるのが、2011 年 7 月に上海社会科学院歴史研究所で開催された国際シンポジウム「新知識 新学科 新職業」の開催であった。同会議には中国、日本、韓国、香港などから合計 18 本の上海と都市研究に関連する報告が用意され、精緻な議論が展開された。今回の上海会議は、実は以上のような背景のもとで開催されたものである。

それでは以下、城山氏の「学会レポート」と重複しないように配慮しつつ、幾つかの報告の内容について紹介しておきたい。

まず、岩間一弘氏の報告は、1920 年に入り初歩的ながら大衆消費社会に突入する上海にクリスマスとサンタクロースがどのように導入されたのかを、『申報』、『新民晩報』などの新聞資料をもって後付けしようとしたものであった。氏は上海の新聞広告に登場するサンタクロースの広告から話を始め、1920、30 年代の上海の百貨店

が展開したクリスマス商戦について紹介した後、日中戦争と文化大革命を経て息を潜めていたクリスマス商戦が 1980 年代以降に再び表舞台に登場する一連の過程を紹介した。このテーマは、上海の大衆消費社会の形成や都市中間層の形成について優れた先行研究（『上海近代のホワイトカラー』研文出版、2011 年）を発表している氏の問題意識が反映されたものであったと言える。アメリカの大衆消費社会を象徴するマクドナルド、コカコーラ、そして、ディズニー映画に登場するシンデレラとミッキーマウスは、上海でどのような変容を成し遂げるのか、多くの人の興味を引く問題である。

次に、江文氏の報告は、欧米との接触から新たに登場した職業である「新聞記者」が、1920 年代の上海でどのような生活（日常、給料、執筆活動など）を営んでいたのかを紹介するものであった。その指摘によれば、1920 年代の後半には大学を卒業した女性の記者への進出もみられ、1945 年以降には上海を代表する新聞『申報』や『新聞報』など多くの新聞社が女性の新聞記者を採用したという。1930 年代に入って組織された「新聞記者公会（協会）」は、日中戦争という混乱した時代を挟み、正常な活動を展開することは不可能であったが、中国の知識人層を形成する新聞記者の動向は国民党にも共産党にも、そして日本にも大きな影響を与えたものであったことを考えれば、新聞記者という職業層に関する研究は今後大きな進展が望まれる分野である。

徐青氏の報告は、満州事変後の日本の上海イメージを『犯罪科学』（1930 年 6 月創刊～1932 年 12 月廃刊、東京、武俠社）という雑誌を取り上げて分析したものであった。従来の日中関係史の研究において 2 国間の関係は、主に両国の官僚（日本を訪問した官僚や外交官）、新聞や雑誌の記事、そして、文学作品などによって検討されてきたが、上海とは何の関係も想定されない『犯罪科学』という雑誌が上海研究号の特集記事を組んだ理由はどこにあったのか、を論じた徐清氏の報告は、1930 年代のマスメディアの発達により「危険で、犯罪的で、欧米列強に支配された、遅れた」上海という「負のイメージ」が日本で定着したことを指摘するものであった。氏の報告は、中国における日本研究や日中関係史研究が取り上げる日本関係の研究素材がさらに一歩進んでいることを窺わせてくれるもので、今後の動向は注目に値する。

一方、神奈川大学の非文字資料研究センターが進めている図像資料を取り上げた研究手法とほぼ同じ枠組みを使った姚霏氏の報告は、「図像資料からみる清末の女性

と都市空間」をテーマにしたもので、『申江勝景図』、『飛影閣画冊』、『点石斎画報』など旧来の資料を利用しつつも、図像資料を歴史資料として読み込むことの重要性を指摘するものであった。但し、姚霏氏の報告を聞きながら感じたことは、歴史、演劇、建築、服飾など異なる研究領域をもつ専門家がディシプリンを越え、横断的に協力し、「非文字」資料を読み解く共同研究を進める状況は、まだ十分に整備されていないようだと言う点だった。

また、ラジオと映画館というメディアを取り上げた報告も二本、行われた。張姚俊氏の報告は、1920年代を前後した上海に登場した外国資本のラジオ放送について触れ、ラジオ放送が都市の発展と人々の日常生活にいかなる影響を及ぼしたのか、を論じたものであった。しかし、その根拠となった資料が上海檔案館編『旧中国的上海广播事業』（1985年）を頼っていたこともあり、新たな知見を展開するには及ばなかったように思えた。上海市檔案館には1920年代のラジオの草創期から1940年代の汪兆銘支配下の上海のラジオ放送の実態について、そして、1950年代以降の「上海人民广播电台」にいたるまでの、詳細なラジオ関連檔案が現存しているので、今後のさらなる研究が期待される。ちなみに、趙凱主編『上海广播电视志』（上海社会科学院出版社、1999年）は、草創期の上海のラジオ放送に関わった関係者のインタビューを掲載しており、大いに活用することができる。

劉暢氏の報告は、1920年代に設立された上海の映画館について分析を加え、映画館の場所が上海の都市空間にどのように配置されていたのか、その意味を論じたものであった。それによれば、当時の上海の開封館と二番館、三番館の配置は、それぞれ南京路とバンド（外灘）を中心とする商業中心地、共同租界とフランス租界の文化区域、租界の中国人の居住地域に分布していた、という。確かに上海の都市発展と娯楽施設の空間配置の相関関係をとらえ直そうとする意欲は理解できるものの今後、その他の娯楽施設（例えば、ダンスホール、レストラン、ホテルなど）の空間配置との関係を加える必要があるのではないか、という疑問をもった。それと同時に、同じ問題意識を欧米の娯楽施設ではなく、中国人の娯楽施設（茶楼、戲園など）に向けた時にどのような空間配置の相関関係が見て取れるか、大いに興味がそそられるものであった。近年は、中国でも空間を軸とする地理学と、時間を軸とする歴史学の融合が盛んに言われ、上海では復旦大学、華東師範大学、上海師範大学などが歴史地理研究を取り上げた研究活動を展開している。関連す

る研究動向にも注意する必要があるだろう。

以上、2011年度の上海会議の開催の経緯と城山氏が触れていない報告を中心に個人的に感じた幾つかのことを思いつくままに記した。東アジアの都市研究をテーマにした巡回会議を呼びかけた私たちのささやかな試みは、2013年春にはソウル市立大学に引き継がれて開催することになり、私たちも参加する予定である。同大学の「都市人文学研究所」<http://ihuos.uos.ac.kr/>は中国、日本、インド、シンガポール、アメリカ、ドイツなどを含めた「アジア都市フォーラム」（Asian Urban Forum）を組織することを目指しているという話を聞く。

また、2012年7月には上海社会科院歴史研究所で「外国の文献にあらわれた上海と中国」をテーマにした国際シンポジウムが開催される予定であるという情報にも触れている。東アジアの近代都市の形成に大きな影響を与えた租界と居留地を取り上げた各国の都市研究の勢いはいましばらく続きそうである。

しかし、すべてが明るい話題ばかりではない。どこでも急造の成果が求められ、研究者は大部分の時間を証拠書類の作成にふり回さなければならなくなったからである。いくら優れた制度や組織が用意され、莫大で潤沢な研究経費が確保できたとしても、知のパラダイムを支える自由という風土が確保されなければ、新たな発見と創造は生まれるはずもなく、形式と動員という呪縛が残るのみではないか、と危惧する昨今である。

国際シンポジウム「都市新媒体与近代上海」参加記

城山拓也（大阪市立大学非常勤講師）

二〇一二年二月二五、二六日、上海師範大学で行われた国際シンポジウム「都市新媒体与近代上海」に参加した。このシンポジウムは、上海師範大学都市文化研究中心、神奈川大学非文字資料研究センター、そしてソウル市立大学都市人文研究所という三大学の共同主催で、中国、日本、韓国における研究者が一堂に会して、メディアと近代上海というテーマについて議論を行うことを主旨としている。

この三大学主催でシンポジウムを行うのは、今回がはじめての試みである。そのために、当日はそれぞれの報告者の研究について、互いに紹介し、交流をするという意味合いが強かった。まずは当日のプログラムをまとめておこう。

国際シンポジウム「都市新媒体与近代上海」（都市のニューメディアと近代上海）

二月二五日午前

第一セッション「都市新媒体与中国社会」（都市のニューメディアと中国社会）

司会：楊劍龍（上海師範大学）

蘇智良（上海師範大学）「《申報》与近代中国」（『申報』と近代中国）

孫安石（神奈川大学）「在上海発行の日本の報刊一以《上海新報》与《上海案内》為中心」（上海で発行された日本の新聞・雑誌一『上海新報』と『上海案内』を中心に）

金承郁（ソウル市立大学）「『銀行周报』（一九一七——一九二五年）和近代上海的銀行業」（『銀行周报』（一九一七——一九二五年）と上海における近代的銀行業）

コメンテーター：村井寛志（神奈川大学）、謝俊美（華東師範大学）

二月二五日午後

第二セッション「報刊与都市文化」（新聞・雑誌と都市文化）司会：戴鞍綱（復旦大学）

楊劍龍（上海師範大学）「媒体視閥中《新青年》封面与挿図的文化韵味」（メディアとして見る『新青年』の表紙、および挿絵の文化的情趣）

李培德（香港大学）「月份牌广告画与中国摩登女性（一九二〇至三〇年代）」（日めくりカレンダーの広告、および中国のモダンガール〔一九二〇から三〇年代にかけて〕）

鈴木将久（明治大学）「浅析鲁迅与瞿秋白有关翻译的讨论」（鲁迅と瞿秋白の翻訳に関する議論をめぐって）

城山拓也（大阪市立大学非常勤講師）「關於一九三〇年代中後期的中国現代主義文学一以《小説》、《文艺画報》、《六芸》為中心」（一九三〇年代中期以降における中国モダニズム文学について一『小説』、『文艺画報』、『六芸』をめぐって）

湯哲声（蘇州大学）「中国近代伝媒与中国文学現代化轉型」（中国の近代メディアおよび文学の近代化）

中村みどり（早稲田大学）「上海現代派改写的日本主義小説一以《蝴蝶夫人》為中心」（上海の現代派が書き換えたジャポニズム小説一『お蝶さん』を中心に）

洪煜（上海師範大学）「近代報刊与城市文化研究一以近代上海小報為中心的考察」（近代の新聞と都市文化研究一上海の小報を中心に）

林春城（木浦大学）「懷旧、記憶、歷史一以彭小蓮の“上海三部曲”為中心」（懷旧、記憶、歷史一彭小蓮『上海三部曲』を中心に）

第三セッション「報刊与近代社会」（「新聞・雑誌と近代社会」）司会：孫安石（神奈川大学）

謝俊美（華東師範大学）「報刊与近代国民性的形成一以《杭州白話報》為例」（新聞・雑誌と近代的ナショナリティの形成一『杭州白話報』を例として）

岩間一弘（千葉商科大学）「聖誕老人来到了上海一從報紙看聖誕消費的社会史初探」（サンタが上海にやって来た一新聞から見るクリスマス消費の社会史初探）

江文君（上海社会科学院）「無冕之王：近代上海の新聞記者」（無冠の帝王一近代上海の新聞記者）

戴鞍綱（復旦大学）「《江南商務報》与一九〇〇年的上海及江南」（『江南商務報』および一九〇〇年の上海、江南）

韓智恩（ソウル市立大学）「場所記憶媒体的“歷史景觀”一以利用近代歷史景觀的上海城市再生為例」（場所を記憶するメディアとしての“歷史景觀”一近代的歷史景觀を利用する上海の都市再生を事例に）

邵雍（上海師範大学）「晚清上海画報中的都市妓女」（清末上海における画報の中の妓女）

姚霏（上海師範大学）「從図像看晚清上海女性与城市空間一兼論図像学在歷史研究中的運用」（図像資料から見る清末の上海女性と都市空間一および歴史研究におけるイコノロジーの使用について）

石川照子（大妻女子大学）「在上海工作的日本女性一其現状及媒体欲向学生們伝達的事情」（上海で働く日本人女性一その現状とメディアが学生たちに伝えたこと）

二月二六日午前

第四セッション「電影、广播与近代中国」（映画・ラジオと近代中国）

司会：謝俊美（華東師範大学）

張景岳（上海音像資料館）「用電影記錄上海的經典之作一評前蘇聯紀錄片《上海紀事》」（記録映画の名作から見る上海一旧ソ連のドキュメンタリー『上海紀事』を評す）

富井正憲（漢陽大学）「影像中的亞洲都市研究一清水宏導演的《京城》」（映像におけるアジア都市の研究一清水宏監督『京城』）

張姚俊（上海市檔案館）「二〇世紀二〇年代上海的外商電台及其影響」（二〇世紀二〇年代上海の外資系ラジオ局とその影響）

劉暢（上海師範大学）「都市文化視野下的二〇一三〇年代上海電影院」（都市文化として見る二〇、三〇年代上海の映画館）

徐青（復旦大学後期博士課程）「九一八事变爆發後日本の上海認識一以新雑誌《犯罪科学》為中心」（満州事变勃発後の日本における上海認識一新雑誌『犯罪科学』を中心に）

内田青蔵（神奈川大学）「關於由R・H・布朗頓整備の横浜居留地下水道（之一）」（R・H・ブランドンによる横浜居留地の下水道整備について〔その一〕）

大里浩秋（神奈川大学）「近代日本租界の研究課題」（旧日本租界研究の課題）

田島奈都子（姫路市立美術館）「從戦前日本制作の海报中可見的“中国主題”的存在及其思路」（戦前期の日本で製作されたポスターに見られる“中国モチーフ”の存在とその考え方）

このプログラムを見ても分かるように、二日間の日程において、報告者が二七名にも上るという盛り沢山の内容である。報告者の専門も、歴史学、文学、社会学、建築学、美術など多岐に渡っており、多様な角度から近代上海について議論しようとする意志に満ち溢れていた。こうした豊富な内容により、各セッションにおいて、中国語を母語とする研究者は一〇分、それ以外の研究者には二〇分の時間が与えられていたが、あっと言う間に時間がなくなってしまった。

本稿では、誌面の都合上、すべての報告を詳細に紹介することはできない。ここでは、文学を専門とする筆者の立場から、当日の議論と交流の様子を追うことにしよう。

第一セッションは、基調報告という性格が強く、中日韓の三カ国の報告者、それにコメンテーターによる議論、および交流が行われた。例えば、筆者の場合、韓国中国研究に疎いたため、金承郁氏の議論が拝聴できたことは嬉しかった。金承郁氏の報告は、『銀行週報』という雑誌を分析して、当時の上海において、「銭荘」とは異なる、新たな経済感覚が生みだされていたことを指摘するものである。近代化と経済とは、切っても切り離せないものだとすることを、私などは痛感したのだった。

本シンポジウムに関して、私個人が得たものの一つとしては、研究対象に対する研究者自身の方法論、あるいは態度の多様性である。例えば、第二セッション「報刊与都市文化」の主眼は、近代上海にある一定の歴史を前提するのではなく、むしろ歴史を生み出してきた枠組みを問うことにあった。楊剣龍氏の報告は、「五四新文化運動」の陣地と見なされる『新青年』を、表紙や装丁などの形式面から捉え直そうとする。李培徳氏は広告ポスター「月份牌」について、特に煙草会社の事例に注目して、そのモダンガールの表象を分析した。あるいは、鈴木氏、中村氏の報告は、当時の上海の作家が、翻訳を通じていかに海外の文化を書き換えたのかを議論する。これらの報告は、文化そのものというよりも、文化を映し出す枠組み（＝メディア、媒体）を問うことで、上海への新たな視野を獲得しようとする試みと言えるであろう。

個人的に関心を持ったのが、洪煜氏による「小報」に関する報告である。「小報」は、『申報』などの大手新聞と異なり、その量も種類も膨大であり、いまだ全貌をうかがい知るに至っていない。洪煜氏の発表は、その「小報」を発掘、整理することにより、現在の我々の知る近代上海を、ラディカルな形で相対化しようとするのであ

る。同じ意味で、湯哲声氏、林春城氏の議論も、清末、それに同時代と、歴史的背景は異なるものの、これまで研究者が前提としてきた枠組みに、疑問符をつけようとしていた。なお、私（城山）の発表も、これまで看過されてきたモダニズムの雑誌に注目して、新たな歴史的位位置付けを行おうとする試みである。

このように、第二セッションでは、研究対象を重視することはもちろん、研究に対する我々の姿勢、あるいは前提を問い直そうという意志に満ち溢れていた。

研究対象に対する姿勢という面では、続く第三セッションは、文学を研究する身として、かなり勉強になったセッションであった。このセッションは、主に歴史学の立場から、メディアと社会について議論がなされている。実は、本シンポジウムは、歴史学を専門とする参加者が中心となって立ち上げられているため、直球どストレートの内容ということができののだ。

第三セッションでは、まず、これまで看過されてきたメディアに注目して、新たな歴史的位位置づけを行う試みがなされた。謝俊美氏の報告は、『杭州白話報』を掘り出して、清末における地方の新聞において、いかに西洋の啓蒙思想が受容されていたかを分析する。また、戴鞍鋼氏は、『江南商務報』を取り上げて、清末における社会経済の様相にスポットを当てた。その一方で、逆に有名なメディアに対して、新たな角度から分析を行う報告も行われている。例えば、岩間氏は、『申報』、『文匯報』、そして『新民晩報』などのメディアを用いて、消費文化がいかに上海に本土化したのかを検討する。江文君氏の報告は、主に『新聞報』を通じて、名をなした知識人ではなく、無名の新聞記者の役割に注目するものだ。これらの報告は、いずれも実証的かつ着実な態度で、近代上海の様相を書き換えようとする試みである。

同じく、図像研究、ジェンダー研究などの角度から、最新の成果も報告された。邵雍氏は『点石齋画報』、『図画日報』に描かれている妓女から、歴史を再構築していく。さらに姚霏氏は、「図像学」の方法論について、具体的な史料と共に紹介してくれた。これらの研究からは、文字に定着していない資料から、歴史を再構築する刺激的な試みであると言えよう。また、現在の上海を事例として、韓智恩氏は、現在の上海の都市計画が、近代の「歴史景観」を再利用していることに注目し、近代史を戦略的に用いようとする意識を洗い出していく。さらに石川照子氏は、ジェンダーの視点から、具体的なアンケート

調査に基づいて、上海に働く日本人女性の現状を分析した。

以上、第三セッションから、私は歴史学における最新の成果を、具体的に知ることができた。このように、他分野の研究者との交流も、今回のシンポジウムの大きな魅力の一つであった。

最終日の第四セッションは、本シンポジウムの参加者にとって、最もラッキーなセッションの一つだったに違いない。

文字資料もさることながら、映像、音声資料は、本当に手に入りにくい。そんな中で、張景岳氏の報告は、のっけから刺激的だった。この報告は、一九二七年にソ連のグループによって撮影された上海の記録フィルム『上海紀事』を、実際の映像を紹介しながら、その史的重要性について議論するというものである。都市のモダニズムを研究している私としては、永安公司の屋上で炭酸水を飲み、チョコレートをかじる人々、それに郊外で麻雀などをしながら余暇を過ごす人々が印象的であった。文字の中でしか知りえなかった風景を、実際の映像で目の当たりにできる喜び。ああ、たまらない！

他にも、富井正憲氏は、一九四〇年当時のソウルを映したフィルム、清水宏監督『京城』を特別に持ってきてくださった。富井氏による懇切丁寧な解説（通訳は徐青氏）がまた魅力に富んでおり、途中で時間オーバーしてしまったものの、司会の謝俊美氏の「最後まで見ましょう」という意見に、反対する人は誰もいなかった。こうした魅力的な映像に幻惑されつつ、張姚俊氏と劉暢氏のラジオ、映画館に関する報告によって、社会的な裏付けが取られていく。貴重な資料に着実な議論。研究の楽しみとは、こういうものではないだろうか。

最終日の後半は、「国際シンポジウム」という肩書きに恥じない、国籍の越境を意識させる報告が続いた。例えば、徐青氏是一九三一年の日本の雑誌『犯罪科学』「上海研究号」を通じて、当時の日本人の上海に対する認識を分析する。内田青蔵氏は横浜居留地の下水道整備に着目して、西洋の衛生観念が日本の建築に及ぼす影響を考察した。さらに大里浩秋氏は、日本租界の研究として台湾における資料の蔵書状況、それに租界研究における態度について報告を行う。ラストに、田島奈都子氏により、中国モチーフが用いられたポスターが、膨大な資料と共に紹介されて、私などはトドメをさされたのであった。

以上、駆け足でシンポジウムの様子を報告したが、その濃密な内容が伝わっただろうか。報告の多さのために、

討論の時間がなくなってしまったのは残念であるが、その辺りは夜の交流会でカバーできたと思う。聞くところによると、すでに来年のシンポジウムに向けて、準備が進められているらしい。今後の発展も予感できる、大成功の結果になった。

最後になってしまったが、我々を温かく迎えてくださった上海師範大学人文学院の蘇智良氏、日本側のまとめ役に徹してくださった神奈川大学非文字資料研究センターの大里浩秋氏、孫安石氏、さらに今後の交流について具体的な提言をしてくださった韓国のソウル市立大学都市人文研究所の金承郁氏、韓智恩氏に、この場を借りて感謝を申し上げたい。

（城山拓也氏の参加記は、雑誌『東方』第375号、2012年5月号に掲載された文章を、著者と『東方』の許可を得て転載したものである。）



写真3 参加者記念写真
前列右：上海師範大学人文学院 蘇智良教授
前列中央：上海師範大学校長 張民選教授

研究調査報告

『日本近世生活絵引』南島編編纂共同研究 八重山蔵元絵師画稿

得能壽美
(非文字資料研究センター研究協力者)

『日本近世生活絵引 南島編』は、昨年度（2011 年度）から 3 年にわたって、大きく 3 つの絵画資料の検討を進めている。初年度は、そのうちの「八重山蔵元絵師画稿」について、何度かの勉強会を重ねたうえ、2012 年 2 月 24 日から 26 日の日程で、「八重山」の現地調査を行った。参加者は、渡辺美季氏（非文字資料研究センター研究員）、富澤達三氏（非文字資料研究センター研究協力者）と筆者。渡辺氏は八重山経験があるが、富澤氏は初体験とのこと。

1. 「八重山蔵元絵師画稿」について

いくつか予備的な情報をまとめると、「八重山」は沖縄県の最南西端に位置する島々の総称で、石垣島・西表島・竹富島・小浜島・黒島・新城島・波照間島・鳩間島・与那国島などからなる諸島の名称になっている。前近代（王府時代）は八重山島が行政区画名として用いられ、明治期には全域で八重山郡となった。現在は、石垣島の石垣市、与那国島の与那国町と、多島嶼からなる竹富町があり、石垣市は尖閣諸島を含む。

「蔵元」は、王府時代の八重山島の行政府で、はじめ竹富島に置かれ、のち石垣島に移されて何度か移動したが、最後は現在の石垣市立八重山博物館の南西側の地にあった。

その蔵元に「絵師」がおり、次のようにいわれる。

彼等が特に重んぜられたのは、在番奉行や頭などが蔵元管内の各島村を監視巡回の旅に立つ、いわば「親廻り」の時に随行員の一員として行動をともにすることであった。そしてこの各島巡回の際には地図の調整はもとよりその他命をうけるままに筆写の任に当るのである。さらにこの絵師の最も重要な役務の一つに来島異国船の報告資料の作成があった。公文書は蔵元の筆者などが取扱ったが、絵師は必ず通事とともに漂流漂着の難破船の船着場にかけつけ、これ等の異国船の船形の実写はもとよりその他異国人

の肖像・風俗画などを正確に写し取って首里王府へ報告したのであった…その他蔵元内の人頭税の上納貢布の各村へ配布する図柄の作成、また御嶽仏閣などにおける壁画も殆んど彼等絵師の筆によるものが多い。また旗頭の図案中にもそれが多く遺っている。いずれにしても公的な絵画に関する一切の任をこの絵師が担っていたのであった。勿論先記したごとく当時の蔵元政庁には常時絵師が 2 人ずつ勤務していたのである。（喜舎場永珣「蔵元政庁の絵師」／『八重山民俗誌 下巻』沖縄タイムス社 1977 年 379 頁）

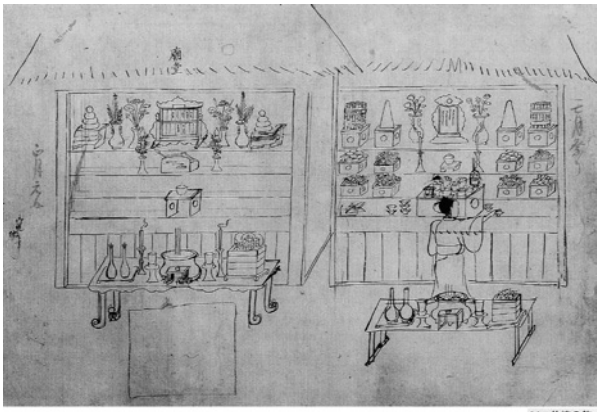
「八重山蔵元絵師画稿」は、かつて「八重山風俗図」と称され（『沖縄大百科事典』など）、大正 12 年沖縄県女子師範学校などの教員であった鎌倉芳太郎氏が、琉球芸術の調査のために石垣島を訪れ、最後の絵師であった宮良安宣から譲り受けた。その後、鎌倉氏は東京美術学校教官を経て、東京で紅型の制作にあたり、昭和 48 年重要無形文化財「型絵染」保持者（人間国宝）となった。「八重山蔵元絵師画稿」は、同 52 年同氏から石垣市立八重山博物館に寄贈され、平成 23 年沖縄県有形文化財に指定された。全 114 点からなり、近世末の民衆生活などを描いた作品が多い。

2. 旧家の仏壇調査

今回の調査では、「八重山蔵元絵師画稿」の現物を確認することと、八重山歴史研究会の会員を中心に聞き取りをすることを大きな目的とした。また、「画稿」№.24 に描かれた仏壇の飾りについて、旧家の仏壇を実際に拝見するという機会を得ることができた。

調査の順に記せば、2 月 24 日午後一番に石垣空港に着き、市内大川にある森田家におじゃました。亡くなられたご当主の森田孫榮氏は、八重山文化、とりわけ芸能・民俗に造詣が深く、著書に『八重山芸能文化論』などがある。旧家の格式を保持する同家の仏壇についても、か

ねてからお話をうかがっていた。現在、同家を管理される親族の方の説明を受け、「画稿」№.24 の飾り物について、多くのことを確認することができた。とりわけ、左側上から 2 段めにある龍が巻いている蝋燭など、「画稿」の世界が生きていることには感動した。旧知であることに甘えさせていただいた部分が大きかったが、もちろんウートートー（位牌への祈り）もして、孫榮先生にご理解をいただいた（つもりである）。



24 仏壇の飾

その後、竹富町教育委員会の竹富町史事務局、石垣市総務部市史編集課を訪問。竹富町の役場や教育委員会などは、竹富町域になく、各島嶼からの交通の便のよい石垣島（石垣市）に置かれており、森田家からは徒歩 5 分。「画稿」研究や町史最新刊の『竹富町史 第二巻 竹富島』などについて、通事孝作氏、飯田泰彦氏と情報交換をさせていただく。さらに徒歩 1 ～ 2 分で、石垣市役所庁舎にある石垣市総務部市史編集課へ。課長（当時）の松村順一氏の会議終了を待って、「画稿」研究をはじめとする最近の八重山研究についての情報交換をした。夜、西表島のイノシシ肉などに舌鼓を打つなど、八重山飲食文化の研究を存分にしたことは、調査報告で取り上げる内容ではない。

3. 「八重山蔵元絵師画稿」の実見と聞き取り調査

翌 25 日は、午前中、八重山博物館での「画稿」実見。館長（当時）の宮良芳和氏にご挨拶をしたのち、学芸係長の島袋綾野氏に現物を見せていただく。

「画稿」は複写版が八重山博物館から発行されていて、事前の勉強会ではそれを使用した。細部にわたって確認しなくてはならないことがいくつか生じたため、主としてその点についての調査となった。やはり実物は迫力

があり、それまで見えてなかったことが、浮かび上がってくるようだった。

同館は筆者のもとの職場であるので、同行者に館内を案内し、「画稿」に描かれたモノの現物を紹介した。森田家の仏壇もそうだが、絵画だけでなく、現物が残っている。場合によっては今も使用されているという「文化」はすばらしい。この後、クバ笠をはじめ、いくつかの「画稿」モノが土産物店で無造作に販売されているのを見て、同行者たちは驚くことになる。

徒歩 7 ～ 8 分で、石垣市立図書館へ。郷土関係図書担当の石垣司氏の案内を受け、郷土資料室を拝見、その後、書庫に入れさせていただき、関係書籍などを閲覧した。

午後は、石垣市文化協会の事務所にて、聞き取り調査を行う。八重山歴史研究会の石垣久雄氏、川平永光氏、登野原武氏、石垣英和氏、石垣市文化協会の前津栄信氏、上地貞昭氏である。神奈川の研究室で呻吟していたことが、「あっこれはアレ」と、即座に説明と方言が出てくる。たとえば、№.46、船に乗った人物が両手に 1 本ずつの棒を持って、その先を海中に入れている図は、「2 本持っているのはタコ獲り」と速答。№.43、収穫した稲藁を保管するシラ（稲叢）を作っている横に描かれた木を組んだモノは、ずっと何だか不明で、著者は『八重山人頭税廃止百年記念誌あさばな』（南山舎 2003 年 181 頁）で誤ったことをいってしまったている。「これはシラの土台だ」と、わずか数分のことで氷解、などなど。モノも使われていれば、経験知も残されているのである。

夜は、地元出版社の南山舎の方々との情報交換をしつつ、楽しい飲食文化研究を。最終日は、富澤氏と著者は雨の竹富島へ。島の感覚を、少しはご理解いただけたか？

竹富島を理解するといえ、前日、竹富島の「種子取の歴史と変遷を考える」という全国竹富文化協会による星砂の島文化講演会が、石垣島で開催されていた。パネラーは、聞き取りの中心となっていた石垣久雄氏をはじめ、阿佐伊孫良氏（元竹富公民館長）、狩俣恵一氏（沖縄国際大学教授）。孫良さんには、竹富島から戻った石垣港離島ターミナルでばったり。会の様子をうかがうことができた。

年度末近くのご多忙の時期に、多くの方々にお時間をつくっていただき、また、大きな成果をいただき、たいへん感謝しています。地元とつないで、我々の成果としてきちんとまとめるという重責を感じつつ。

研究調査報告

海外神社跡地から見た景観の持続と変容 旧満洲国国都新京(長春)の海外神社跡地調査

津田良樹
(非文字資料研究センター研究員)

2012年3月6日から11日にかけて旧満洲国の国都新京(長春)において海外神社跡地調査を行う機会を得た。調査参加者は本学特別招聘教授馬興国、法学部教授橋川俊忠と私である。6日に瀋陽に入り11日に長春から帰国するというスケジュールで、その間に瀋陽から長春への移動もあり、6日間の旅とはいえ、実質的には7日一日が瀋陽、9・10日の二日間が長春の調査であった。瀋陽では遼寧省档案馆における資料調査、長春では旧新京神社、旧満洲国建国神廟、建国忠霊廟の現地調査が主目的であった。馬興国先生にお願いし、遼寧省档案馆・旧新京神社・建国神廟については事前に許可をいただく目途がついていたが、建国忠霊廟については中国空軍の管理下にあり極めて難しいとのことであった。

瀋陽での3月7日はまず遼寧省档案馆に同行願った馬先生の案内で、王崎研究員を訪ね、遼寧省档案馆を案内していただいた。しかし、なにせ中国の档案馆であり、所蔵資料については自由に目録をくり、資料を閲覧できる状況にはない。資料を特定した上で、あらかじめ閲覧の願いを出しておかねばならないようであった。それでも、どのような資料群が所蔵されているのかの当たりをつけ、稀少本である『遼寧省档案馆蔵日文資料目録 上、下』を手に入れることができた。また、満鉄時代の資料が一部翻刻されており(相当に大部なものである)、それを購入することが可能であることもわかった。

その後、建国忠霊廟とは機能的には近い陵墓建造物である清朝第2代皇帝ホンタイジの昭陵の諸建築の見学をおこなった。昭陵の中心部方城の四隅に角楼をもつ城壁や隆恩殿を中心に東西に配殿を配する建物配置は建国忠霊廟の建物群と共通点があるようである。また、牌楼など建国忠霊廟がデザインモチーフにしたのではないかとと思われる建物も確認した。8日にはかつての満鉄に乗って瀋陽から長春入りした。

長春での3月9日は、偽満皇宫博物館前副館長の李茂傑氏の案内で、まず旧新京神社に向かった。旧新京神社

は、旧境内が現在吉林省人民政府高官の子弟の幼稚園と長春市政府高官の子弟の幼稚園とに分割して使用されている。いずれも党幹部達の子弟の幼稚園であり、敷居が高く内部はこれまで見学できなかった場所である。6年前、塀の外から肩車され盗み撮りした記憶がよみがえる。⁽¹⁾警備は厳しいが旧境内地に無事入ることができた。社殿で残っている部分は拝殿とかつて本殿へと繋がっていた幣殿の一部である。外観は切妻造で木造の破風板や垂木などが残り、かつての面影を残している。とはいえ拝殿の建物だけが時代から取り残されたかのように、周囲を取り囲んで建てられた園舎はパステルカラーで彩られメルヘンチックな様相である。旧拝殿内部にも入ることができたが、残念ながら昨年大改修が行われたとのことで、真新しい床・天井が張られ、柱を赤、壁面や長押を白で真新しく塗装され、園児達の遊戯場に変身している。そのため、拝殿時代の様相を何う痕跡もほとんどない。

ついで、旧満洲国皇帝溥儀の宮廷府(現、偽満皇宫博物館)では建国神廟の跡地の補足調査を行った。6年前には大急ぎで実測したこともあり、未確認の箇所があったためである。また、建国神廟に造られた「天照大神防空壕」を確認するという目的もあった。南面していた社殿の礎石群の背後、東西ほぼ対称的な位置に地面から角状にコンクリートで造られた出入り口が突き出していた。このコンクリートの施設は地下に造られた「天照大神防空壕」に降りる階段の覆いである。本来は出入り口付近まで土で覆われ、陵墓などでしばしばみられる土饅頭の如くなっていたものと思われる。「天照大神防空壕」は緊急時に御神体などを避難させるために秘密裏に造られた地下壕であると判断される。内部を確認したかったのではあるが、内部はまだ未整備であるとの理由で許可されなかった。

10日は早朝から旧建国忠霊廟に出かけた。旧建国忠霊廟は中国空軍の管理下にあり、周囲には空軍関係の宿舎や学校が建っており、周辺を日本人が徘徊すれば目立



建国神廟跡地
社殿の基壇・礎石がかつての社殿の規模を伝えている。その背後両脇に三角形状に角を突き出したような施設が地下壕(「天照大神防空壕」)への出入り口である。かつてはその間にみえているコンクリートの塊部分も含めて、土饅頭状に土に覆われていたのであろう。

つだろうからとの配慮のためである。また、旧建国忠霊廟内に住みついている廃品回収業者が一日一度外に出るのだそうで、その時に当たれば内部をのぞき見ることができるのではないかと馬先生の情報に期待をかけての行動であった。旧建国忠霊廟に着くと、なぜか閉ざされた回廊の正門である「内門」の扉が開いていたのである。開いている扉から中を窺うと、重機でトラックにゴミや瓦礫の積み込み作業を行っている最中であった。住みついていた業者の持ち込んだ瓦礫などを撤去しているのではないかと想像された。それをいいことに目立たぬように密かに回廊内部の写真を撮影したのであった。後悔が残る結果となるのだが、さすがに、空軍の管理だということで、入れるところならどこまでも入りこんで撮影するという、いつもの行動をとることはばかられた。その後、回廊の外から見るができる霊殿などの撮影を行っていると、早くも公安の車が近づいてきた。住民から通報があったのかもしれない。早々にその場を立ち去ることにした。その後、かつての参道などを確認すべく、建国忠霊廟時代の地図を頼りに探したが、変貌が激しく難しい状況であった。それでも、地元の人達から話を伺ううちにかつての状況を知る老人にいきつき、その老人の案内で廟務所跡、廟務所から大同大街(人民大街)に通ずる道、さらに大同大街に面して開く「側門」のふたつの門柱が残っていることを確認することができた。

旧建国忠霊廟は空軍が管理しているとはいえ、現在は荒れるがままに放置された状態である。仄間によると旧建国忠霊廟を重点文物として保存する動きがあるやに聞く。⁽²⁾保存されることはよいことだが、しばしば中国で行われる旧状を無視した無神経な修復が施される恐れを



氷点下17℃の朝もやの中に建つ旧建国忠霊廟
回廊内の現在の様子。奥に見える大きな建物が旧祭殿である。重機による瓦礫の撤去作業の最中であった。

感ぜざるをえない。修復が行われる場合には事前に本格的学術調査がなされることを期待したい。そのほか新京忠霊塔跡地なども確認したが、忠霊塔は跡形もなく軍関係の学校となっている。考えてみれば、神社や忠霊塔の跡地は、戦後まったくフリーな未利用地となったわけであり、中国では多くの場合、軍や政府機関が接取することになったようである。そのため、神社や忠霊塔跡地などの調査は、軍や政府機関の制約との戦いにならざるをえないという現実と直面することになっている。

そのほか、日本の城そのままに造られた旧満洲国の実質的支配者であった関東軍司令部の建物がそっくり中国共産党吉林委員会に衣替えしている様相を驚きをもって実見した。権力の移行を赤裸々に示すという権力者の政治的意図はよくわかるが、その意図の中には民衆がいただく感情や民衆からの視点は全く欠如していると感じざるをえなかった。体制の実態を端なくも露呈しているとみるのはあまりにもうがった見方であろうか。

- (1) 「旧満洲国の『満鉄附属地神社』跡地調査からみた神社の様相」(『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化 第4号』2007年3月)の際の調査。
- (2) 帰国後に分かったことであるが、建国忠霊廟は1987年に吉林省級文化財に指定されているようだ。しかし、管理者である空軍側はそれを受け入れず、「文化財認定」板の設置も拒否しているのだという。(周家彤「長春市における『満洲国』遺跡群の諸様相」現代社会研究科研究報告、第7号、愛知淑徳大学大学院現代社会研究科、2011.3)

研究調査報告

水辺の生活環境史

汽水域の漁撈－涸沼のスマキ－

 安室 知
(非文字資料研究センター研究員)

1. 汽水湖としての涸沼

涸沼は茨城県の太平洋岸のほぼ中央に位置している(図1)。湖水面積 9.35 平方キロメートル、湖岸延長 20 キロメートル、平均水深 2.1 メートル(最大水深 6.5 メートル)。那珂川の堆積作用によりできた海跡湖である。太平洋に近く、潮の干満の影響を受け、約 6 時間おきに潮の流入を受ける。そのため、涸沼東部の湖水は汽水となる。淡水魚だけでなく海の魚も多く見られ、全体で 50 種以上もの魚類が棲息している。古くからコイ・フナ・ウナギ・スズキ・クロダイなどの魚類のほか、シジミなど貝類の好漁場として知られる。

涸沼の中でも涸沼川の流入口に当たる地域(涸沼西部)と涸沼川の流出口に当たる地域(涸沼東部)にはヨシやモク(藻)の繁茂する浅堆地が広がっている。このうち涸沼東部は、海から潮が逆流して滞水し、土砂が十分に涸沼川に排出されずに堆積してしまうため、とくに浅く広い浅堆地になっていた。そうした浅堆地は、潮が引いたときには島のように陸地化するセガタ(瀬潟)がところどころにできる。そのため、そこは江戸時代から近代に至るまで干拓による新田開発が行われてきた。

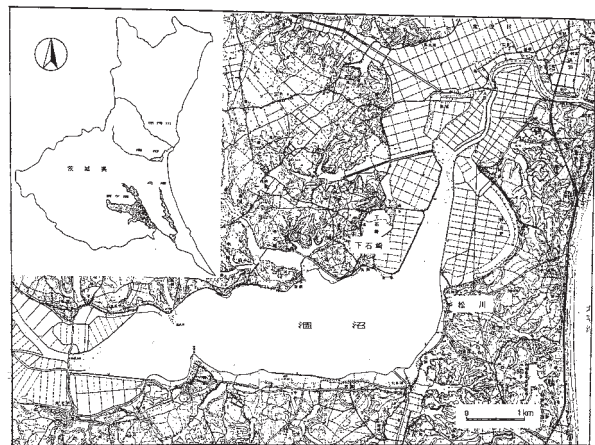


図1 涸沼の位置

2. スマキとは

汽水湖たる涸沼に伝わる特徴的な漁法にスマキがある(図2)。竹で編んだ簀を湖上に立てめぐらせて建造する。スマキの呼称はその形態から付けられたもので、漢字を当てると簀巻ということになる。スマキは定置性迷入陥穽漁法の一つで、いわゆる琵琶湖のエリ(魩)と同様のものである。その特徴は内水面漁撈としては世界でも最大級の規模にある。涸沼においては全長 100 間(180 m)に及ぶものがかつて作られており、もちろん涸沼の中では最大規模の漁法である(図3)。

伝承の上では、涸沼においてスマキの歴史がもっとも古く、また今までにもっとも大型(全長 100 間)のスマキが建てられたところが松川である。同時に涸沼の中で

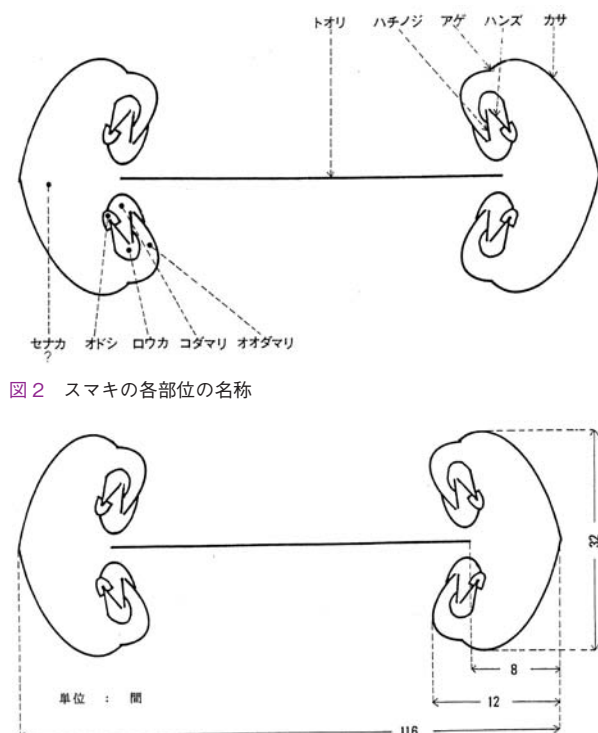


図2 スマキの各部位の名称

図3 スマキの規模－涸沼における最大級のもの－

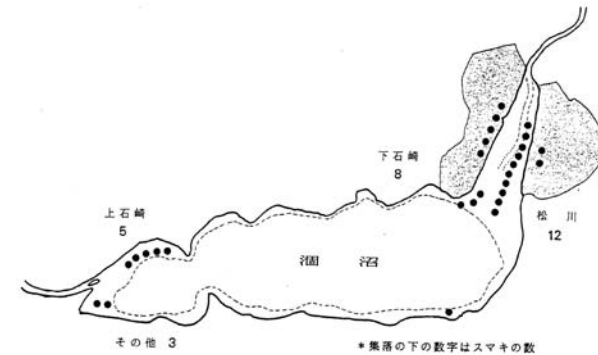


図4 スマキの行われた場所－昭和初期－

最後までスマキが残ったのも松川である。

松川でのスマキの起源については、江戸時代に「殿様」から「松川六十三戸」に権利が与えられたものであるという伝承がある。その事実関係は不明である。また、スマキの技術は仙台または北浦から涸沼へ伝わったとされる。ただし、北浦や霞ヶ浦に見られる定置性迷入陥穽漁具は、琵琶湖のエリと同様に岸辺に基点を設けて、そこから水面に傘を広げた形を成すいわゆる突き出し型であり、涸沼でスマキを建てていた人たちは北浦や霞ヶ浦のものとは建造の手口がまったく異なるという。その違いを生み出す最大の要因が、涸沼を汽水域にしている潮の定期的な流入にある。

図4に示した通り、スマキは涸沼川の流出口の付近に広がる水深 2 メートル以下の浅堆地に集中して見られた。1920 年代後半、涸沼には全部で 28 か統のスマキが有ったといわれるが、上記の浅堆地に面して立地する松川に 12 か統と下石崎に 8 か統が存在した。

こうした浅堆地の特徴は、浅く平らであるというだけでなく、海の干満の影響により、6 時間おきに潮の上り下りがあることが挙げられる。海の魚はその潮の流れに乗ってやってくる。そうした魚を潮をうまく受け止めるようにスマキを建てて迷い込ませるわけである。構造上はスマキは魚の上りと下りの両方に対応する形になっている。

3. スマキと潮

スマキが多く分布する涸沼川流出口(涸沼東部)は、潮の干満の影響を受け「塩水半分」といわれる状態にある。その浅堆地の流心部に強い潮流の行き来する一本の筋がある。それをミオ(滞)と呼ぶ。ミオは涸沼川の延長線上に浅堆地を突っ切るように流れており、周りの浅堆地に比べると一段深くなっている。これがスマキに

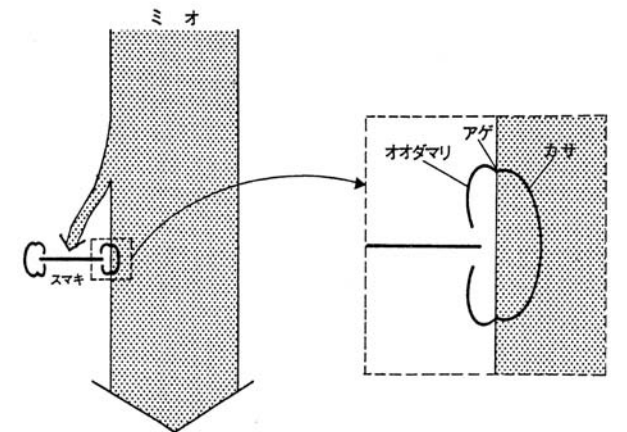


図5 スマキをミオに掛けて建てる技術－潮の呼び込み－

としては大きな意味を持っている。

スマキは通常は 3～7 尺(90cm～2 m 10cm)ほどの水深のところに建てるが、より高度になると、ミオの支流をうまく受け止めるように建てる。ミオの流れの一部を受けることにより、より多くの海産魚の漁獲が期待される。この場合、ミオの支流を受け止めるようにしてスマキの方向を決める。

また、スマキ建てに長けた人になると、図5にあるように、スマキのカサの部分をもミオに少し掛けることにより、ミオからの分流を半ば人工的に作り出し、それをスマキに呼び込むこともできた。ただし、ミオ自体にスマキをかけることは禁止されている。また、実際は禁止されるまでもなく、ミオの流心を流れる強い潮を、スマキのトオリで直接受け止めることはとうてい無理であるという。

もうひとつスマキと潮の関係で忘れてはならないのは、その形態が潮により大きく規定されている点である。涸沼は干満の影響を受け 6 時間ごとに潮の流れる方向が 180 度変わる。そうした 6 時間ごとに方向の変わる潮流に対応する形として、定置性迷入陥穽漁法としては一般的な形態である突き出し型をとらず、傘の内側を向き合わせたようなスマキ独特の形ができています。潮の上りにも下りにも対応するように、左右対称でしかも両側に 2 か所ずつ、やはり対称形をなすように捕魚部のオドシが設けられているのはそのためである。この形態はたとえば琵琶湖ではサカサガケ(逆さ掛け)といっごく例外的な場合を除き、けっしてやってはいけないものとされている。

ことばのひびき～言語処理の音韻的側面

松澤和光（非文字資料研究センター研究員）

言語の研究者である私が、よりもよって「非文字」の研究に関わっている不思議はさておいて、いや、よく考えてみれば確かに言語の出自は文字ではない。原初人類の声による意思疎通が文字の形に定着したのは、とうぜん言語の誕生よりずっと後のことに決まっている。が、何にせよ例外はある。

まず、私の本来の専門分野たるコンピュータ科学、そこにおける「プログラミング言語」はまさにその例外であろう。この言語は文字の姿で生まれ、音声による読み上げを想定していない。プログラミング言語は数多く開発されて来たが、発音記号付きの用語集やプログラムの正しい朗読法などと言ったものには、未だかつてお目にかかったことがない。しかし教育の現場では、学生に向けてプログラムを語って聞かせないわけにもいかぬ。そこで整数を意味する用語「int」を、さて「イント」と呼ぶか、integer の略なら「インテ」かしら、などと思ひ悩むことになる。（って私だけか？）

別の例外として現代日本語を挙げよう。もちろん、言語としての日本語は（成立の詳細はともかく）声から始まった筈であるが、問題が起こったのは明治維新であった。列強から怒涛のごとき新概念の侵略が起こったとき、維新の英雄たちはこれらを片っ端から新造語として国語に取り込んだ。その英断と努力は敬服に値するが、惜しむらくは新造語の構成漢字を意味だけから選んだこと。読みがどうなるかまでは手が回らなかったに違いない。さらに言語としての音素種の少なさも要因に加わって、日本語には大量の同音異義語が出現する。鈴木孝夫氏が様々な著作で提唱する「テレビ型言語」[1] なる日本語の特徴である。すなわち、例えば「こーこー」という発音を聞いたとき、それが高校・航行・孝行・煌々など数ある単語のどれなのか、私たち日本語話者は瞬時に漢字群を映像的に走査して判断しているのだという。

本来、音から発達した言語であれば、単語は全て異なる発音で区別されるべきだろう。現代日本語における同音語の多さは言語として異常とも思われる。そして、こ

の特徴は思わぬ副産物を産み出したのではないか。同音語を自在に利用した言葉遊び ― 語呂合わせと駄洒落の文化の隆盛である。やれやれ、やっと私の研究を語るところに辿り着いた。

白状しよう。冒頭で、言語の研究者とかコンピュータ科学が専門だとか色々気どってはみたものの、私はコンピュータによる駄洒落生成マシン～B級機関の製作者としての黒歴史？を負っている。石部金吉氏揃いの工学世界において、そんな怪しい研究者がどんな扱いを受けたか、シクシク……。いーんだもん、人工知能学会から賞まで貰ったもん、ベスト・プレゼンテーション賞だけど[2]（ま、駄洒落がプレゼンかは置いといて）。

さて、B級機関の雄姿を図1に示す。ピラミッド型の内部ではコンピュータがひたすら駄洒落を創り出し、これが永遠に吐き出され続けるという、永久機関ならぬB級機関。自動生成された駄洒落の一端は図2に示した。実のところ、駄洒落の生成自体には研究的意義はない。私の秘かな狙いは、駄洒落に代表される音韻的／感性的な日本語の言語感覚と、その工学的な取扱いの可能性を指摘することにあった。（すみません、今更ながらの言い訳です。）

ソシュールの言語哲学に拠れば、言語記号は表記（シニフィアン）と内容（シニフィエ）の2面を持つというのが定説である。「イヌ」という音韻表記は、「犬」が指し示すあの犬懐っこい動物の概念内容とは独立しており、言語によってはその生き物を「ネコ」と呼ぶことも充分あり得るわけだ。言語をコンピュータ処理する場合も、犬は例えば N1002334 などと無機質に記号表現され、そこに本来の読み情報に関わる余地はない。「音声読み上げを想定しない」プログラム言語で操作される以上、イヌというシニフィアンが忘れ去られるのはある意味必然であったのかも知れない。こうして現代における人間言語のコンピュータ処理（「自然言語処理」と不自然に名付けられている）では、処理の早い段階で言語の音韻的側面は姿を消し、もっぱら無味乾燥な記号対象と

して検索やら翻訳やらの操作が施されている。言語で表現される本質がその概念内容にあるとすれば、シニフィエ偏重の処理も当然の帰結と言えるだろう。

しかし、人工知能の立場から人間の思考行為を担う基盤としての言語を考えると、その音韻的特徴を簡単に捨て去って良いのか疑問が生じる。イヌのことを考える際に、その音韻的類似性からフッと「居ぬ・去ぬ・稲」などの連想が働きはしないか。頭の中でネコが勝手に寝転んだりはしないか。語感から来る連想が、思考を発想豊かに展開し、推論を情感たっぷりに方向付け、判断を臨機応変に下す手助けとならないだろうか。同じ意味の文章でも、なぜ文豪の作品は心打つのか、名演説に心動かされるのか。息の合った友人らとのおしゃべりに、こんなにも心弾むのはなぜなのだろうか[3]。言語と思考において「音のクオリア」[4] が果たす役割の重要性を、私たちはもう少し認識し直すべきかもしれない。

以上のような考察を背景として、現在、松澤研究室では「駄洒連具」と名付けた言語処理ツールを開発している[5]。これは単語間の音韻的な類似度を計算するもので、既存の歌詞とよく似て聞こえる文章にニュース記事を整形したり、聞き間違え易い単語をチェックしたりといった応用を模索している。さらに、別途開発中の単語間の意味的な類似度を計算する「類神具」と組合せて、人間の感覚に則した言語処理を目指していきたい。こうした取り組みが、やや取り残された感のあるシニフィアンの言語処理の新たな発展に寄与できれば幸いである。これが単なるC級機関の作製で終わっては、洒落どころか「謝礼」にもならない。オウトガヨロシイヨウデ

参考文献

- [1] 鈴木孝夫：日本語教のすすめ、新潮新書、2009
- [2] 松澤・金杉・阿部：コンピュータ上の言語感覚実現に向けて～B級機関、人工知能学会全国大会、1998
- [3] 梅田規子：おしゃべりはリズムにのって、オーム社、1997
- [4] 黒川伊保子：怪獣の名はなぜガググゴなのか、新潮新書、2004
- [5] 古田・天沼・松澤：ニュース記事を歌詞化するシステムの提案、第40回ことば工学研究会、2012



図1 B級機関

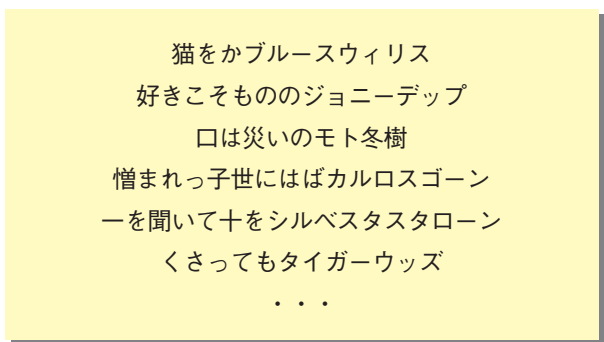


図2 自動生成された駄洒落群

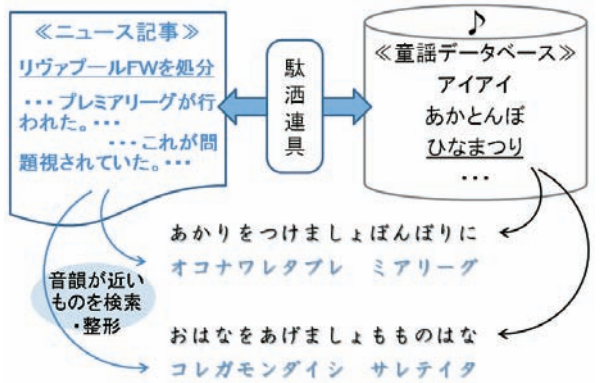


図3 ニュースの歌詞化システム

コラム 招聘レポート

名前	所属	招聘期間
Bruno Hissatugu	サンパウロ大学 哲学・文学・人間科学部 写真・映像人類学専攻 修士課程	2011 年 10 月 2 日～10 月 22 日
Sonja Hotwagner	ハイデルベルク大学 クラスター 日本学専攻 博士課程	2011 年 10 月 15 日～11 月 4 日
祝 鵬 程	北京師範大学 民俗学専攻 博士課程	2011 年 11 月 4 日～11 月 24 日
Josef Antonius Kyburz	フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センター 教授	2011 年 11 月 10 日～11 月 30 日
康 楽	中山大学 日中比較文学専攻 博士課程	2011 年 11 月 10 日～11 月 30 日
趙 李 娜	華東師範大学 中国非物質文化遺産保護研究中心 博士研究員	2011 年 11 月 27 日～12 月 17 日
聶 友 軍	浙江工商大学 日本文化研究所 研究員	2011 年 12 月 1 日～12 月 21 日
徐 智瑛	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科 博士課程	2011 年 12 月 7 日～12 月 21 日

外国だが身近に感じる国

Bruno Hissatugu
(サンパウロ大学)



神奈川大学非文字資料研究センターと、サンパウロ大学の日本文化研究所によって実施されているこの交流プログラムに参加できて光栄だった。

この交流プログラムは、私に鹿児島でフィールドワークを実現する機会も与えてくれた。私の現在の研究テーマはブラジルにおける日本人移民、それも主として鹿児島出身の私の母の家族の移民の歴史、記憶、アイデンティティである。そのため、鹿児島訪問は私にとって重要な意味があった。

まず、日本に到着した日からすべての面でお世話になった神奈川大学大学院生の渡邊由里恵さんに感謝したい。渡邊さんは、日本語を話すことも理解することでもできない私を助けてくれ、外国人である私が迷わずにあちこち動き回るのを手助けしてくれた。

事務室の彦坂綾さんにも、日本到着前から色々と支援していただいたことに感謝している。細かい点によく気がつく思慮深い方である。同様に事務室の和田秀子さんにも支援していただき感謝している。

私の指導教員になってくれた泉水英計准教授にはたいへんお世話になった。私が希望していた以上のことについて指導していただいた。学校が終わった後もたいへん有意義な対話をしたが、話題はいつも文化人類学の分野のことだった。研究室の皆さんとも啓発的な話ができたとともに感謝したい。自分の研究の方向付けはおおむね正しいが、今後改善しなければならない点もあると感じた。写真資料を公共施設または大学などのアーカイブで

保存するための様々な取り組みや方法論を考察することもできた。

渋沢資料館学芸員の永井美穂さんともお会いできた。永井さんには、鹿児島国際大学で教べんをとるご友人の黒瀬教授を紹介していただいたばかりでなく、ブラジルの日本人居留地に関するご自身の研究についても話をうかがった。それが私の鹿児島訪問において大いに役立った。また、永井さんと、神奈川大学常民文化研究所特別研究員の小林光一郎さんは、私の鹿児島滞在中のフィールドワークの方法論の準備にあたってもお世話になった。彼らの豊富な経験と助言のお陰で、多くのことが得られたのは幸運だった。

横浜と東京では主に3つの博物館を訪ねたが、いずれにおいても、担当者の皆さんは親切で協力的だった。

国際協力機構（JICA）の横浜国際センターでは、日系人相談センターと海外日系人協会のアドバイザーのエレーナ・ヤマガタさんが、これらの施設に保存されている日本人の海外移民に関するすべての写真資料を見せてくれた。これらの資料により、私の仮説のいくつかを確認するとともにその幅を広げることができ、たいへん有益であった。

財団法人日本力行会では、田中直樹さんが同会の写真アーカイブを見せてくれたが、これも私の当初の仮説の一部を確認するものであり、仮説の幅を広げるのに役立った。

これら2つの博物館のアーカイブでは、日本からブラ

ジルに渡った移民だけでなく、アルゼンチン、ボリビア、ボルネオ、チリ、キューバ、パラグアイ、ペルー、米国などへの日系移民に関する写真資料も見ることができた。それによって、日系移民に対する私の見方や考え方の幅が広がった。ヤマガタさんと田中さんが私の希望に積極的に対応して下さったことに感謝する。

東京都写真美術館も訪ねたが、そこで最も役に立ったのは壮大な図書室だった。この図書室では2日間リサーチをすることができたが、数ヶ月でも過ごせる気がした。このほか、神奈川大学図書館と日本常民文化研究所図

書室も役に立った。

これら3つの図書館・図書室で、私はブラジルでは入手できない多数の有益な資料を発見した。その結果、私は自分の参考文献目録と一般知識を増やす機会を得たのである。

皆さんにたいへん寛大かつ協力的に対応していただき、私としては、第二の故郷にいる感じがした。幸運にも日本で研究する機会を与えられ、また、その機会を最大限に生かすことができたことに、本当に感謝している。

日本初の風刺雑誌—横浜の「名物」

Sonja Hotwagner
(ハイデルベルク大学)



横浜の街並、人気の臨海地域、ランドマークタワー、そして日本最大の中華街を散策していると、この街の国際的な雰囲気を感じることができる。山手地区の旧外国人居留地、外国人墓地、そして有名な赤レンガ倉庫は、徳川（江戸）末期から明治初期の横浜の活気あふれる暮らしの様子を今に伝えている。

1854 年、日本は開国を迫られ鎖国を解いた。その後5つの港が国際貿易のために開かれたが、その1つが東京に近い横浜である。さらに外国人居留地も作られた。イギリス人とフランス人が大半を占めた外国人居留者たちは、祖国から遠く離れた地にあっても、西洋的な生活様式と古くからの習慣を維持しようとした。彼らは地域社会で、競馬、コンサート、演劇、コーヒーパーティーなどを催し、そしてさらに新聞の発行をも始めた。ほどなくして、“Bluff（「断崖」の意）”と呼ばれる山手の外国人居留地は、日本と世界の文化交流の中心地となり、さらに近代的な「文明」を促進する役割を果たすようになっていった。山手で生まれ、日本の日常生活の中に伝えられていった目新しいものの1つに「風刺雑誌」がある。

日本の風刺雑誌の歴史を語るとき、切っても切り離せないのが、チャールズ・ワグマン（Charles Wirgman）の名前である。ワグマンは『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の特派員を務めるかたわら、ユーモア溢れる評論誌『ジャパン・パンチ』を発行した。1862年に創刊されたこの雑誌は、日本初の風刺雑誌となった。

1859 年 6 月 2 日、横浜は西洋人への門戸を開いた。

そのわずか2年後、ワグマンはこの新たな可能性を利用し、日本でのキャリアをスタートさせた。ワグマンはあっという間に日本の文化と社会になじんでいった。日本人女性と結婚し、日本式の服装を身にまとい、日本語をマスターした。外国人居留地という小さな世界の中で、この英国人男性の国境を越えた生活の様子は人々の注目を集めた。ワグマンは山手に暮らす当時の外国人たちから疑わしげに見られていたと、外交文書に記録されている。

ワグマンがほんの面白半分に発行を始めたジャパン・パンチは、最初の発行部数が約200部で和紙に刷られたものだった。同誌は特に日本に暮らす外国人の興味を誘い、横浜に加えて、東京、神戸、長崎といった外国人居留地や貿易地でも売られるようになった。挿絵に添えられる説明文の大部分は英語で書かれおり、西洋の読者向けに作られた雑誌だったにも関わらず、日本人の読者も引き付け、間もなく日本語版も発行されるようになった。

ワグマンの作ったこの長寿雑誌は、横浜の地元のトレードマーク、そして外国人コミュニティをつなぐ絆となった。

まったくかけ離れた文化的枠組の中に存在するヨー



ロッパの縮図のようなコミュニティーの中で、人々は共通のアイデンティティと帰属意識を満たしてくれるものを強く求めていた。ワーグマンの書く挿絵と記事は横浜の地元の交易品と見なされた。西洋の外交官や居留者に対するワーグマンの痛烈なコメントや批判によって、コミュニティーはその存在をよりいっそう確かなものにしたのである。その一方で、この英国出身の国際人は、ヨーロッパから日本にやって来た芸術家にとって最初の立ち寄り場としての役割を果たし、また彼のもとには西洋芸術について学びたいと熱望する日本人芸術家も集まってきた。そしてジャパン・パンチの製作には木版画を扱う日本人職人たちも協力するようになった。ジャパン・パンチは西洋式の風刺画の先駆けとなり、その後の数十年には同様の雑誌が多数作られた。そして風刺画本には、その誌名に「ポンチ」と付けられるようになった。

ジャパン・パンチは当初、外国人居留地内で起きた主な出来事を扱ったり、地域の有名人をからかうような内容を掲載していた。しかしごく限られたヨーロッパ人読者を対象にした雑誌であったにも関わらず、よく見てみ



ると、ジャパン・パンチがわずかではあるものの、日本の政治をすでにその風刺漫画の中に取り入れていたことがわかる。国際情勢を扱った思慮に富んだ漫画からは、ワーグマンが横浜の外国人居留地の外の状況に疎かったなどということはなく、むしろ外の出来事に関心を持ち続け、柔軟な態度を取り続けたことがうかがえる。それにも関わらず、あるいはだからこそ、ジャパン・パンチはますます批判の声を強めていったのだろう。明治維新後の急速な近代化についてワーグマンは危惧していた。自身の描く風刺漫画の中で、ワーグマンはなんの疑いも持たずに西洋文化を模倣することについて揶揄している。

(写真：ジャパン・パンチの表紙、および横浜外国人墓地のワーグマンの墓：神奈川大学所蔵貴重書より)

現代日本における寄席芸術の伝承に関する考察

祝 鵬 程
(北京師範大学)



非文字資料研究センターを訪問した際、私は漫才と落語を主とした寄席芸術¹が現代日本の都市においてどのように伝承されているのかを探ることを課題とした。センターの先生方や院生たちの協力を受けながら、横浜・新宿・浅草・上野などの寄席を見学したり、落語家にインタビューしたりすることができた。国立演芸場の演芸資料室や神奈川大学図書館において文献資料を集めることもできた。以下では、調査の内容を報告したい。

劇場に目を向けてみよう。寄席の多くは、伝統的な形式と西洋的なそれとを共に備えている。寄席の舞台は、伝統的な形式を重視する形で設計されるが、そこには現代的な要素も多くみられる。特に、スピーカーやプロジェクターといった現代的な設備を用いることで、元来、限られた範囲のみに声を伝えることで成立していた寄席の小さな空間を拡大することに成功している。こうして、寄席は様々な層の観衆の需要に対応しているのである。

毎日がテンポよく進む日本社会において、そもそもは

「リトル・コミュニティ」(little community)²に対応する形で存在していた寄席も、かなりの速さで発展している。古典落語では伝統的な噺が話され、基本的には伝統的な型に沿って演じられている。そこでは、師匠を真似て技を学ぶという伝承の方法が重んじられ、落語家の服装や小道具にも、伝統的なものが用いられている。その一方で、観衆の好み、とりわけ若者たちの「笑いのツボ」が変化する中で、演じ方は様変わりを見せてもいる。落語家は、タイムリーな話題を幕開きのセリフとし、噺全体に軽やかなリズムを与えるのである。

反対に、漫才の伝承は個人化が進んでいる。ネタを書く作業は芸人自身の個性に任され、脚本はすべて新作のものである。さらに、ある特定のコンビはある特定の演目にしか登場しないという状況も生まれている。特に、お笑いビジネスに特化した吉本興業が養成所を設立し、現代的な喜劇を取り入れて芸人を養成するようになると、漫才のネタ作りや演出はよりいっそう商業ベースや

流行に則ったものとなっている。

メディアの発達した今日、そもそもは寄席の中で演じられていた漫才と落語もかなり早い時期に寄席の場を飛び出し、テレビや映画に登場するようになっている。そこで漫才師たちは限られた番組の時間内に笑いの技を発揮し、多くの観衆を惹きつけている。

寄席の芸は、伝承の面において問題に直面している。第一に、寄席の数そのものに限りがあるために、落語家たちの演出空間は制限され、演じる時間も短縮を迫られている。第二に、師弟関係の変化により、対面式の稽古でしか学ぶことができない技が失われており、練習の不十分さを招いている。第三に、若者世代が伝統芸能に注目しなくなったことで、寄席の観衆の高齢化が進んでいる。若者の多くは落語の典拠を理解せず、このことが同時に漫才のファストフード化を生み出している。最後に、メディアにとって、寄席芸能はもはや利用するための手段でしかなく、保護する対象とはみなされていない。

現代日本の都市において、漫才は若者たちの間で最も流行し、一方の落語はお年寄りに歓迎されている。基本

的に落語とは異なる伝統を保ち続けてきた漫才は、現在では完全に大衆文化の生産・流通過程の中に埋め込まれており、技を口伝えで伝承してゆくという伝統的なパターンから離脱している。こうして、漫才の生産パターンは演劇のそれと同じになり、書かれた脚本が主導している。そのために、漫才もまた、重複性や間テクスト性(intertextuality)といった口承伝統の伝承がもつ特質を具えることはなくなり、大衆娯楽がもつ新鮮さやオリジナリティがそれにとって代わることになった。

現代社会に入ってから、そもそもはリトル・コミュニティにおいて息づいていた寄席芸術が歩んできた方向性は、考えるべき問題を多々含んでいるのである。

註

- 1) 本文では、現代において漫才と落語を維持させ続けている仕組み（吉本興業やメディア）についても注目する。
- 2) Robert Redfield, The Little Community and Peasant Society and Culture, University of Chicago

日本のお守りの魅力

Josef Antonius Kyburz
(フランス国立高等研究院東アジア文明研究センター)



神奈川大学の非文字資料研究センターで、同センターとフランス国立高等研究院東アジア文明研究センター(CRCAO)の交流プログラムの一環として、3週間にわたって研究を行う機会に恵まれた。本当に魅力的な3週間だった。

今回の訪日は、私が続けている日本の「お守り」に関する研究をさらに進めることが目的であり、それだけに一層魅力的であった。日本には数多くのお守りがあり、横浜や六角橋周辺でもよく見かけるが、私が研究の対象にしているのは紙に印刷されたお守り、つまり、人々がお寺や神社からもらう厄除けや護符で、その形状から、通常「おふだ」と呼ばれているものである。学術研究のテーマとして「おふだ」を取り上げるというのは、海外でも日本でも、やや風変わりであることは明らかである。

確かに、テーマとしては変わっている。というのは、「おふだ」は日本人が学術研究の対象として思いつくようなものではないし、より正確に言えば、日本人はごく最近

までそうは考えていなかったからである。したがって、最初にそう考えたのが、外国人、すなわち西洋からの訪問者や日本文化の観察者であったとしても、意外なことではない。

日本の「おふだ」について最初に西洋に伝えたのは16世紀後半のキリスト教の宣教師たちで、彼らはそれを普遍的な存在として「免罪符」と呼んだ。長崎の出島にあった東インド会社商館付のドイツ人医師、エンゲルベルト・ケンペル(1651～1716年)は、「おふだ」とそれに関連した風習や民間伝承についてかなり詳しい説明を残している。1727年に出版されたケンペルの『日本誌』には、何枚かの「おふだ」の説明図が含まれているが、その中で最も目立つのは、ケンペルが自分で描いた、平安時代の高僧で元三大師と呼ばれた良源(912～985年)の姿である。こうした昔の図的表現が存在することによって、ケンペルが日本に滞在した1691～1692年当時から300年以上にわたってその図像が少し

も変わっていないという事実を我々は証明できるわけで、その意味でこの図像は一層注目に値する。というのも、関東地方の少なくとも3つの主要な寺院、すなわち、調布の深大寺、上野の寛永寺、および川越の喜多院が、今日に至るまでこの黒い角を持つ良源を描いた厄除けのお守りを大量に発行し続けており、角のある姿に身を変えた良源は「角（つ） 大師」の名でよく知られているからである。関西地方でも、災いから一家を守るため、この鬼に似た図像が家の入口の戸に貼り付けられているのが、現在でも人目を引く。

ケンペルは、通訳からこうした紙のお守りについて説明を受けたと思われるが、言うまでもなく、それらを間近で見ることでできる立場になかった。それから約200年が経過すると、外国人を取り巻く状況も変わり、当時、東京帝国大学の日本語学教授だったバシル・ホール・チェンパレン（1850～1935年）は、ラフカディオ・ハーンの助けを借りて、大量の「おふだ」を収集した。友人でアニミズムと呪術思想の研究で有名な人類学者、エドワード・タイラー（1832～1917年）の要請によるものだった。これらの800点余りの様々な日本の「おふだ」は、オックスフォード大学のピットリバーズ博物館に収蔵されている。

それから数十年後、フランスの古人類学者、アンドレ・ルロワグーラン（1911～1986年）は、日本の文部省からの奨学金で京都に滞在していた1937年から1938年にかけて、骨董品店やがらくた屋から大量の日本の神々の図像を収集し、その代表的なサンプルを抽出してまとめようと考えた。このコレクションは、もともとはパリの人類博物館に展示されることになっていたが、現在は、スイスのジュネーブ民俗学博物館に、ほぼ同規模のものが収められている。

第3の大規模な「おふだ」のコレクションは、現在、パリのコレージュ・ド・フランスにある。ベルナール・フランク（1927～1996年）が収集したもので、その数は約1,000点に上る。フランクのコレクションの特徴は、それが日本の仏教の神々の全体像を表現するため、系統的に整理されていることである。フランクは、コレージュ・ド・フランスで日本仏教の図像学について教えていたが、日本仏教の神々の3次元表示は、当時すでにギメ東洋美術館に存在していた。すなわち、同美術館の創設者であるエミール・ギメ（1836～1918年）が1876年に日本から持ち帰った約400体の彫像である。そのため、フランクは紙のお守りに描かれた神々の2次元図

像で構成する自分のコレクションを構築し、それをギメのコレクションに匹敵するものにしようと考えたのである。フランクは、愛情も持って収集した「おふだ」を体系的に研究するつもりだったが、早世したため実現しなかった。

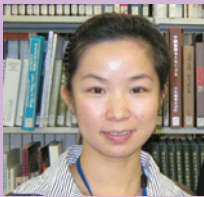
このフランク・コレクションの体系的研究が、我々の研究チームの何人かの学者が取り組んでいる目標である。我々はこれまでに3回、このコレクションの一般公開の実現に成功した。具体的には、2006年9月～10月の町田市立博物館、2010年5月のアルザス地方の都市コルマル、および2011年5月～9月のパリ・フランス国立ギメ東洋美術館における一般公開である。

とはいえ、多くの研究が今後さらに必要である。我々の研究の第一歩は、この1,000点の「おふだ」を分類しその目録を作成すること、そしてそれを一般の人々がアクセスできる2ヵ国語のデータベース（<http://ofuda.crcao.fr/>）としてまとめることであった。しかし、最も重要な作業は、それぞれの図像を個別に検討し、発行元の寺、刻印、関連する特定の宗教集団や信仰、目的、地域の歴史などに関する入手可能なあらゆる情報をデータベースに入力することである。

日本仏教で崇拝の対象となり、フランク・コレクションの1つまたは複数の「おふだ」に登場する合計86人の宗教上の人物の多くは、その信仰全体についての研究がまだ行われておらず、地域によってどのような変種があるかについての研究はさらに少ない。そうしたことを調査するのが、今回の私の3週間にわたる非文字資料研究センターでの研究活動の目的であった。その結果 — これは少なくとも関東地方に関する限りのことだが — 鬼子母神信仰についてはその主要な礼拝場所（雑司ヶ谷の法明寺、中山の法華経寺、大塚の豪徳寺）における全体像が得られたほか、摩利支天信仰（下谷の徳大寺、高輪の泉岳寺）、前述の元三大師信仰（調布の深大寺、上野の寛永寺、川越の喜多院）、および七福神信仰の巡礼場所のいくつかについても全体像が明らかになった。これらの寺院の僧侶や職員の皆さんが口頭で説明してくれたそれぞれの場所の特定の信仰に関する貴重な情報に加えて、現場で個人的に観察したことや、あちこちで可能な限り集めた書き物の類も、我々のデータベースの完成に大きく貢献すると思う。そして、その恩恵を皆さんはフランス語と日本語で享受することができるだろう。

中国における日本映画の伝播と受容

康 楽
(中山大学)



日本映画の対中輸出を、文化大革命期を軸に“文革前”、“文革中”、“文革後”と大まかに3つの時期に区分して、各時期の輸出状況と中国における受容について映画関連文献（映画年鑑、キネマ旬報など）をもとに考察した。



東京国立近代美術館フィルムセンター（左：7F 展示室 右：4F 図書室）

一 “文革前”（50年代）の左翼的映画

中国への日本映画輸出は北星映画配給の「どっこい生きてる」（今井正監督、1951年）「箱根風雲録」（山本薩夫監督、1952年）「女ひとり大地を行く」（亀井文夫監督、1953年）の3作品が初めてである。その後、「混血児」「太陽のない街」「ひろしま」「原爆の子」「蟹工船」「縮図」「山びこ学校」「ひめゆりの塔」などの日本映画が中国へ輸出していった。

「箱根風雲録」などが公開され好評を博したので、日本映画への関心を高めるため、中国対外文化協会、電影工作社連議会の共催で1956年6月24日から30日まで戦後初めて北京において日本映画週間が開かれた。

上映作品は「二十四の瞳」（木下恵介監督、1954年）「太陽のない街」（山本薩夫監督、1954年）「最後の女たち」（楠田清監督、1954年）「愛すればこそ」（今井正、山本薩夫、吉村公三郎共同監督、1955年）「ここに泉あり」（今井正監督、1955年）の5本で、いずれも反戦や資本主義批判をテーマとする左翼的傾向の映画だった。監督陣の木下恵介、今井正、山本薩夫、新藤兼人の演出や、俳優陣の乙羽信子、山田五十鈴、高峰秀子、岸旗江の演技が、一般観客のみならず、中国の映画人からも極めて高い評価を得た。

二 “文革中”（60～70年代）の戦争映画

中国の文化大革命は「封建的文化、資本主義文化を批

判し、新しく社会主義文化を創生しよう」という名目で行われた改革運動であり、1966年から1976年まで続いた。文革期において、資本主義国である日本の映画を受容できる唯一のルートは、「内部上映」と称される政府機関内の映画試写会のみだった。

1971年2月から4月にかけて「連合艦隊司令長官 山本五十六」（丸山誠治監督、1968年）「日本海大海戦」（丸山誠治監督、1969年）「あゝ海軍」（村山三男監督、1969年）が全国各地で盛んに内部上映され、多くの中国人が批判目的で鑑賞することとなった。これらの作品評は中国の映画人や「人民日報」をはじめとする各マスメディアによって大きく取り上げられた。

三 “文革後”（80年代）の日本映画ブーム

80年代の日本映画の中国への輸出は、主として「日本映画祭」を媒介としていた。1978年10月26日から11月1日まで、改革開放後はじめての「日本映画祭」として北京、上海、天津、広州、武漢、成都、瀋陽、西安の8つの大都市で行われ、「君よ憤怒の河を渉れ」（佐藤純弥監督、1976年）「サンダカン八番娼館・望郷」（熊井啓監督、1974年）「キタキツネ物語」（蔵原惟繕監督、1978年）の3本の日本映画が上映されて話題を集めた。引き続きこれらの作品は中国全土で繰り返し上映されたいへんな数の観客に観られた。とりわけ「君よ憤怒の河を渉れ」と「サンダカン八番娼館・望郷」の2つの日本映画は、改革開放時代の到来を表す代表的な作品として熱狂的に受容され、中国における外国映画史上、空前の大ヒット作となった。

1978年に中国で初公開された「君よ憤怒の河を渉れ」「サンダカン八番娼館・望郷」「キタキツネ物語」に続き、1979年には中村登監督の「愛と死」や佐藤純弥監督の「人間の証明」、翌1980年には野村芳太郎監督の「砂の器」が評判になった。

1991年までに「日本映画祭」は定例行事として中国各地でほぼ毎年開催されたため、日本映画は持続的なブームを形成した。

紙面の都合上、ここでは概略を述べるにとどめるが、詳細は今後の研究で明らかにしたい。

崇鳳習俗の日中比較

趙 李 娜

(華東師範大学中国非物質文化遺産保護研究中心)



鳳凰は中華文化が創造した神鳥で、文化交流によって日本にも伝播し、民俗文化の中で一定の地位を有している。本文は「鳳凰崇拜」が日中で異なることについて、その起源や変遷及び各文化背景においての扱われ方の相違について見ていく。

一、中国における鳳凰が象徴する概念の移り変わり

(1) トーテム崇拜から神霊崇拜への変遷

鳳凰は中国原始文化において、鳥と太陽に関する神秘的なものとして起源段階ではトーテム崇拜の性質を持ち、後に神秘性と象徴意義が与えられ神霊崇拜の性質を有した。春秋戦国から漢代において四神概念の中で、鳳凰と朱雀は同質のものと見なされるようになった。

(2) 陰陽不分から女性専属へ、そして王権専属から民間へ

鳳凰は最初純粹陽性だったが、後に「鳳は雄、凰は雌」と区分され、早い段階で鳳は神聖で崇高なものとなり皇帝に関するものに用いられるようになった。宋元代以降、龍の地位が高くなると鳳は皇后やその装飾品専属の呼称となった。明清代には皇室女性の衣装等に使用されるようになり、その後民間でも吉祥を表すものとして使用されるようになった。

二、日本における鳳凰の伝承と変遷

(1) 基礎：原始鳥霊崇拜

日本において鳳凰は渡来文化であったが、以前から鳥霊信仰と太陽崇拜があったため日本の文化に根付くことができた。弥生時代には多くの木製鳥型が出土され、『古事記』や『日本書紀』には鳥信仰に関する重要な証拠が書かれている。

(2) 渡来：四神の中の朱雀

朱雀（鳳凰）は弥生～古墳時代に四神図を通じて朝鮮半島経由で日本に渡来した。キトラ古墳の壁画や薬師如来台座南面の朱雀などから鳳凰信仰の受容がうかがえる。

(3) 伝承：王権と神聖

銅鏡は鳳凰が日本へ伝承した際の主要物の一つとして重宝され、同時に鳳凰も超自然的地位を得た。鳳凰は日本に伝来して以降高貴な地位を保持し、天皇専属のもの

となった。

三、日中両国における崇鳳習俗の比較研究

(1) 文献

中国の多くの古典文献の中で鳳凰に関する記載が見られる。『日本書紀』の中でも鳳凰に関する記述があり、鳳凰への認識は日本と中国で一致している。

(2) 器具

鳳凰は両国で銅鏡や陶器の装飾に用いられていたが、鳳輦においては日中で差異があった。中国では最初皇帝専用だったが後に妃専用となり、同時に媽祖の乗り物となるなど民間信仰にも使われた。しかし日本では天皇専属のものとして使用されていた。

(3) 服飾

鳳凰は明清代には皇后専用の装飾であったが、清代以降民間にも広まり吉祥や美しさを表すものとなった。それに対し日本では主として天皇の礼服に用いられ、「鶏芸」祭祀の服装にも用いられていた。

(4) 建築

中国では秦漢代に瓦上に朱雀の装飾が施されたり故宫の石段上に鳳凰が装飾されたりしていた。日本では寺院の屋根に金色の鳳凰が神聖なものとして飾られていた。

(5) 祭祀及び民俗芸能

古代中国では鳳凰の舞があり、現代でもヤオ族で龍鳳舞が見られる。日本の「鳳凰の舞」は神事活動の影響が大きく、儀式としてのプロセスが見られる。両国の鳳凰の舞には雨乞いの意味が含まれる。鳳凰の両漢字には「舞」の意味があり、『周礼・地官・舞师』中に“雩祭”つまり雨乞い儀式の意味と記されている。

両国の鳳凰の舞の違いを見ると、日本の鳳凰の舞は長い伝承の歴史がある大きな祭祀活動であるが、中国では鳳凰に関する古代の舞踊には雨乞いの意味があったが、現在では多くの地域ですで見られなく、祭祀の意味も既に失われている。

横浜の英字新聞は「台湾出兵」をどのように報道したか —“Japan Punch”と“Japan Weekly Mail”を中心として—

聶 友 軍

(浙江工商大学日本文化研究所)



1874 年、日本は宮古島島民遭難事件を口実に台湾への出兵を強硬に進め、国際世論を騒がせた。なかでも当時、横浜で発行されていた英字雑誌“Japan Punch”（ジャパン・パンチ）と英字新聞“Japan Weekly Mail”（ジャパン・ウィークリー・メール）の二つは、このいわゆる「台湾出兵」（The Formosa Expedition）に対して関心を持ち続け、追跡取材を続けた。ここで重要なのは、両者が何を（What）、どのように（How）述べ、そして何故（Why）そのように述べたのかということである。

“Japan Punch”は、「実に新しく馬鹿げた喜劇が台湾で」との見出しをつけ、八幕にわたる演劇形式でこの事件を取り上げている。“Japan Punch”は事件の発生や経過、結果、影響といったものに対して、見たままを表現するという態度を取り、関連する写真や図を何枚か載せている。一方の“Japan Weekly Mail”は、この事件に関して二十余にも上る文章を掲載している。

“Japan Punch”と“Japan Weekly Mail”はどちらも初期において、揃いも揃って中国を支持し、日本に反対する見解を示している。しかし、その報道の仕方には若干の差があった。“Japan Punch”には、日本の行動を諷刺する漫画が多く描かれており、中国で出兵の準備を整えた日本が相手の勢いを察して逃げ出したのだという見解を示している。しかし、事件が解決に向かう頃には、中国を非難するようになっていった。当時の情勢をかなり正確に把握し、判断を下していたといえよう。

かたや、“Japan Weekly Mail”は、世界の情勢を伝えることから着手し、日本の行動は世界中で非難されるに違いないと述べている。また、西洋の仲裁がもたらした効果を強調するあまり、相対的には中国・日本両国の応酬や両国国内の情勢がこの事件に与えた影響、そしてこれらが争いを最終的に解決していく過程において決定的かつ主導的な役割を果たした事実については、軽視している。

このように、“Japan Punch”と“Japan Weekly Mail”はどちらも、終始一貫して外からの客観的な「中立」の立場を保ち続けたわけではなかった。つまり、中国を支持し、厳しく非難する前半の報道から一変し、日本の出

兵に合理性を見出して日本を弁護し、中国による事件の処理の方法とそれがもたらすことになった影響とにきわめて低い評価を与える立場へと回っているのである。また、両者ともに「台湾出兵」が中国・日本両国の間に深い影響を及ぼすだろうことは予想していたものの、この事件が両国、とりわけ日本の外交政策にもたらす影響については見通すことができなかった。実際には、事件の翌年から日本・ロシア、日本・朝鮮、日本・沖縄、そして日本・中国の関係には、大きな変化が生じるようになったが、こうした変化は多かれ少なかれ「台湾出兵」に起因すると考えられるのである。

“Japan Punch”と“Japan Weekly Mail”がこのような報道を続けた理由として、次の何点かを挙げることができよう。すなわち、①外部に身を置き、客観的かつ「中立」な立場を取るものという報道メディアの理想を守ろうとする姿勢があった。つまり、中国と日本どちらにも不適切な部分があったと指摘するが、だからといって日本が台湾へ出兵したことに正統性を認めるわけではないという姿勢をどちらも貫いている。②編集者の母国であるイギリスの利益に対する考慮があった。特に“Japan Weekly Mail”は、事態がどう進展するにせよ、日本が台湾に滞留し、占領することなど断じて望まないという態度を見せている。③世界的な情勢による影響を受けていた。“Japan Punch”には、二枚の図が掲載されている。それらは、西洋の外交官たちがこの事件に対して持つ普遍的な見方と、横浜にあった英字新聞社の編集長たちがこの事件をどのように報道したのかを示している。④“Japan Weekly Mail”と日本政府がこの事件発生以前から維持してきた友好的な「蜜月」の関係が破綻したばかりで、“Japan Weekly Mail”は日本の政府当局に「打撃」を与えることを望んでいた。⑤事態の進展にともない、情勢が日本に有利に動き始めると、メディアは学者たちによる研究のように慎重かつ明確な見方を表せばよいというわけにはいかなかった。そのために、“Japan Punch”と“Japan Weekly Mail”は両者ともに少しずつ見方を変化させていったのである。

近代前期に日本に渡った韓国女性の足跡を探して

徐 智瑛
(ブリティッシュコロンビア大学)



私は2011年12月7日から21日までの15日間、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターにおいて、短期研究プログラムに参加した。私の研究テーマは「近代前期（1900年代～1945年）に日本に渡った韓国女性労働者について」である。

近代以前、ほとんどの文明社会において、伝統的に女性是人目につかない家庭の領域にとどまっていた。韓国の場合、強い儒教思想と家父長制度の下、女性は日常的に独りで自由に外出することを許されず、特に上流階級の女性は自由な外出ができなかったと言われている。一方、20世紀初頭の韓国では、女性が故郷や家族を離れ、新たな生活を求めて大都市への移動を始めていた。

女性たちが都市部に移り住んだのには二つのパターンがある。一つは教育のため、もう一つは労働のためである。私が関心を持っているのは、恵まれない階級から、仕事や新たな生き方を求めて都市に移り住んだ女性たちのことである。こうした女性たちは、伝統的な女性の生き方、あるいはへき地の厳しい貧困からの脱却を試みたのである。西洋の近代性が、へき地の恵まれない階級の女性たちにどのように浸透していったのか、私はそこに注目した。

植民地時代の韓国で、女性の人口の約4%が仕事を求めて農村部から都市部へ移り住んだと言われている。その時代に都市に移り住んだ女性の数はそれほど多くはないが、割合でいえばそれは決して小さくはない。なぜなら教育目的で都市部に移り住んだのは韓国の女性人口の1%未満であったからである。さらに、移住した女性の中には、日本や中国などの外国に移り住んだ人たちもいた。当時の韓国は植民地ではあったとはいえ、恵まれない階級の女性たちは、資本を追って、あるいは新たな生活を求めて、国境を越えるという危険を冒したのである。

植民地時代に仕事を求めて日本に渡った女性たちは、主に紡績工場などの工場労働者になったか、レストランのエンターテイナー、またはカフェやバーのウェイトレスになったことが知られている。しかし、当時の日本に渡った韓国女性の歴史的足跡をたどるのは容易なことではない。そもそも女性労働者に関する明確な公式記録が

ないのである。神奈川大学に滞在している間に、私は1900年代から1945年に作成された韓国人移民に関する主要な資料を探し求めた。見つかった公式文書からは、韓国から日本に渡った移民の数、日本への移住の行程、韓国人労働者の日本における分布、韓国人移民の生活および労働環境、地域ごと（東京、神戸、大阪、京都など）の韓国人移民の労働および社会的・政治的活動の記録、伝記による韓国人移民史などの情報が得られた。

韓国女性労働者の手掛かりが含まれた資料もいくつかはあるが、近代前期の日本における韓国女性に関しては散発的な記録がわずかに残るだけである。私にできる唯一の方法は、さまざまな資料に散在する断片的な痕跡をつなぎ合わせて、こうした女性たちの歴史的な位置付けを発見することだ。歴史を再構築するのは本当に大変な作業である。歴史に埋もれたこれら多くの女性たちは、歴史的プロセスを経験してきた時代の証人でありながら、何も語らず存在が目に見えないのでなおさらだ。さらに彼女たちは自身の人生の主体者であったはずだが、その存在は隅に追いやられ、権力あるいは中央の観点からは無視されてきたのである。

私のリサーチは、歴史の周辺に追いやられた「他者」を追跡する試みの一つである。神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センターで個人プロジェクトを遂行し、私は貴重な時間を過ごすことができた。このプロジェクトに際し、物心両面で全面的なサポートをしてくださった同センターの先生、スタッフ、チューターの皆様に心よりお礼を申し上げたい。

英語、中国語でいただいた招聘レポートは、事務局で日本語に翻訳させていただきました。

コラム

派遣レポート.....

名前	派遣先	派遣期間
田 遠	北京師範大学文學院 民俗学与文化人類学研究所	2012年3月1日～3月21日
李 徳雨	浙江工商大学 日本文化研究所	2012年3月5日～3月25日
于 洋	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科	2012年3月8日～3月23日
白 莉 莉	ハイデルベルク大学 クラスター	2012年5月2日～5月22日

帰国した華僑・留日学生が語った戦後初期における在日中国人留学生組織の結成—東京を中心に—

田 遠
(外国語学研究科中国言語文化専攻 博士後期課程)



1. 中国人留日学生組織の結成

対面した78歳の郭氏は、かなり活発な性格と温厚な人柄が印象的であった。彼は「戦争終結直後は、日本各地にいる中国人華僑・留学生たちにとって組織を結成することがなよりの急務だったが、東京でも神戸でも組織化に最初に動いたのは台湾人のグループだった¹」と語り始めた。これは「結成」というよりも、日本に対する愛国心や忠誠心に反発したことで、日本政府から弾圧された台湾同郷会の再結成に近いものであった。最初に台湾人留学生組織は、台湾同郷会の学生部としての形をある程度揃えた。しかし、1945年9月、日本在住の台湾人たちが、明治学院大学で台湾同郷会の成立大会を開催したものの、まもなく内部分裂があり、統一性のある同学会ではできなかった²。しかし、中心となるメンバーは基本的に揃った。このような背景があり、一ヶ月あまりの準備期間を経て「台湾学生連盟」が結成され、機関紙「龍舌蘭」の発行や各部門の具体化、名簿の作成などの活動を始めた³。

その一方、大陸出身者たちはそれぞれの政権の崩壊や他の原因により、戦争中には帰国せず、戦争終結直後に改めて相互の連絡を取ったが、組織化を進めることは容易なことではなかった。まず政府当局に戦時中の生活の経緯を説明し、配給と救済金受給のために、合法的な身分を取得しなければならなかったことを考えると、老人

は「ある意味、大陸出身留学生の生活は、台湾人留学生より優遇されていたとは言い難い」と話した。組織をまとめるにあたり、貧しい生活のせいもあるが、過労で亡くなった大陸留学生幹事も数人いた⁴。1945年12月中旬、大陸出身留学生組織である「中華民国留日学生東京同学会」がようやく発足した。

2. 二つの留学生組織の合併

1946年に入ると、二つの留学生組織を合併する問題が浮上した。台湾人留学生であれ大陸出身留学生であれ、「留学生」である。曾ての敵国で何を習ったか、そして祖国・中華民国に対しての「忠誠心」はどうなっているのか、これらの疑問を持つのは、戦争に惨勝した中華民国政府にとっては、当然のことであろう。老人もこれについては「留日生活経緯の説明と忠誠を誓わせることは必要なことだった」と説明した。1946年2月、合併に原則的に合意したところで、大陸出身の留学生たちは国民政府教育部宛に「中華民国留日同学總會」の名義で手紙を送った⁵。これはおそらく、個人で説明するより、組織団体だと対話が進みやすいと考えたのであろう。

ここで提起したいのは、二つの留学生組織が合併する際、大陸出身の留学生と違い、台湾人留学生たちの身分は曾ての「日本帝国臣民」から「中華民国国民」へ転換することになったが、それは決して容易なことではなかったという点である。歴史的な経緯もあるため、政府と、抗日戦により日本軍を「追い出した」当時の政府を敬っている大陸出身の学生は、台湾人留学生を簡単に受け入れようとはしなかった。さらに言語の壁もあった。郭氏の記憶によると、当時は、台湾人たちが学生寮内で話す言葉はだいたい日本語か台湾語だったらしく、帰国

1 2012年3月 郭氏のインタビューより
2 2012年3月 廖氏のインタビューより
3 林連徳 「中国留日学生総会側記」—『建国初期留学生帰国記事』 P400-401 中国文史出版社 1999年
4 『中国留日学生報』1952年3月号
5 2012年3月 郭氏のインタビューより

後、仕事の際もお互いに日本語で話したということである。また、台湾出身者は連合国人として取り扱われてないため、戦後出された「連合国人及び中立国人、無国籍人に対して食糧の特別配給制度」の対象外になり、「中華民国国民」という身分を入手しないと配給がもらえないという問題も抱えていた。そのため、当時、東京同学会と合併することについては、台湾留学生連盟のほう
が急いでいた。これらの問題は両組織合併後にもずっと絡まっていたようだ。「一言で言うとね、私は『戦後初期には、大陸出身の方でも、台湾留学生でも、迷迷糊糊（ミーミーフーフー 混沌）』としか言えない状態だった」

近・現代化に伴う中国杭州の食生活変化の断面

李 徳雨
(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



2011 年、非文字資料研究センターから嬉しいニュースが届いた。それは、私が派遣若手研究支援の一環として、派遣研究員となることを許可された通知書であった。韓国から日本に留学をしている私が、中国で 3 週間の派遣研究を行える事になったのである。2012 年 3 月 5 日(月) から 3 月 25 日(日) まで、中国浙江省にある浙江工商大学の日本文化研究所に「近・現代化に伴う食生活変化の研究」というテーマで訪問することになり、王勇教授、陳先生など、現地の先生とチューターさんのお陰で、中国の食生活を体験し、調査することができた。

筆者は韓国・日本の食生活に関心を持っており、特に近代化以降、変化した食生活にフォーカスして研究している。今回、中国の事例は日韓の事例とは別の研究テーマとして、また東北アジアの一つの国として、日韓中の相互理解をするために、距離的には近いが異なる食文化であること、またその変化の研究を比較するために中国という国を選択した。

浙江工商大学は上海から車で 2 時間ぐらい離れた杭州という所にあるが、筆者が訪問した日本文化研究所は、さらに杭州市内から 1 時間ぐらい離れているところの下沙キャンパスにあった。杭州は南宋時代の首都で「西湖」と呼ばれる自然遺産があり、中国人が人生の最後に住んでみたいというような観光地でもあり、環境的に安定している場所である。また龍井村という中国最大の茶葉生産村があり、中国で唯一のお茶博物館がある。お茶

というのが郭氏の感慨であった。日本の敗戦当時、中国自体が従来の「政權」(日本統治下の台湾復帰、満州国、汪精衛政權などの傀儡政權の崩壊など)を大きく変動させることになり、それは日本にいた中国人華僑・留学生にとって大きな試練となって降りかかってきた。在日中国人社会の変貌も戦後の外国人登録や戦勝国民特配などにより加速し始めた。その中で、知識人としての中国人留日学生の動態は、今日に至る日本と中国(中華人民共和国、中華民国)との関係の一つの原点として注目されるべきだと思う。

というのは単に食事の後の飲み物としてのものだけではなく、食生活の余裕を楽しめる嗜好飲食として、中国食文化の代表的な特徴であるといえる。また地域別に、味、栄養、香辛料などに差がある中国で、南に位置している杭州は、王様、貴族の料理から一般の庶民料理まで多彩な種類の料理があり、杭州の食文化の特徴であるといえる。特に杭州の名物として乞食鶏(Beggar's Chicken、叫化鸡)、東坡肉(东坡肉)、西湖の淡水魚料理などは、杭州食生活の特徴がよくみられる食べ物である。

今回の派遣研究を通じて得られた大きな収穫は、実際の中国人の家庭を訪問し、彼らの食生活を体験してみたことである。3 月のある日、A さんの家の夕食会に招待された。A さんの家では、主に夫が料理を担当し、招待された 8 人ぐらいの友人たちと一緒に夕食を食べさせて貰った。中国の多くの食べ物を食べてみることでできる機会でもあったが、それよりも彼らがどのように料理を準備し、どのような話をしながら食事をしているのかに非常に興味があったが、食卓では彼らの考えなども感じることができ、非常に意味がある席となった。

また 吳山広場(吳山广场)という所の小吃文化(屋台料理)は、日本、韓国とは違う庶民の食生活をのぞくことができた機会であった。びっしりと並んでいる屋台のような店で様々な食べ物を選んで真ん中のテーブルで食べている人々、また日本や韓国では簡単には食べることができない様々な食材で調理された料理を観察した。

彼らはなぜ屋台で食べているのだろうかという疑問があったので、数時間ここに滞在し、彼らと一緒に食べてみて、彼らの表情を見て、話を聞いてみた。ほとんどの人の反応は、低価格であること、そして簡単な食事としては味がいいとのことだった。一方で小吃料理から出た生ごみを処理するのに奔走している姿も見えた。全部食べることなく、少し残していた姿が多く見られたが、これは中国人が料理を消費する 1 つの習慣を確認することができる機会になった。近代化以降の食生活は、急激に変化しながら、世界的に生ごみ処理の問題が発生し、生ゴミをどのように処分するかの問題で悩んでいる。そして消費意識の教育、社会運動など、さまざまな角度から改善点が要求されている。このような問題は中国も同じ状況にある。お客を招待して食事を持て成す際には、



吳山広場の小吃文化

お客が食べ残すくらいの量の食事を提供することがマナーとして知られている中国では元より生ごみに関して寛大な印象があった。

中国杭州における食生活の変化はどこでも簡単に見ることができる。お茶中心の飲料文化は路上でテイクアウトのコーヒー文化によって変わられ、和食、韓食などの多国籍料理店などではそのような変化像がよくみられる。近代化以降、文化開放され、フランチャイズ店やファストフード店の登場で多様化する食生活の中に共存する彼らの伝統文化、また多くの人口が消費する食糧とそれに伴う生ごみが社会的問題化されていること、このような風景が中国における食生活の変化の一断面を見せてくれる一例として、今後の食生活の研究において多くの示唆を残してくれた派遣研究であった。



家庭食

カナダの多元文化及び日系人の移民

于 洋
(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



2012 年 3 月 8 日から非文字資料研究センターの若手派遣研究者としてカナダのプリティッシュコロンビア大学アジア学科を訪問し、バンクーバーとスティヴストンへの調査をする機会を頂いた。今回カナダの多元文化と民俗、特に、移民文化を体験した。さらに、和歌山県の漁民がスティヴストンへ移民した歴史に注目し、地元伝統文化と外来の異文化との融合の現状を探ることにした。

1 カナダ文化と民俗

カナダには多種類の民族がいるため、多種文化を持つ国である。原住民を除くと、ほかの人たちはすべて外来移民であるため、移民の国と言われる。政府は移民に自分の文化、伝統と言語を維持させたため、この多元文化はうまく発展した。1945 年以来、アジアの日本や中国などの国からの移民もカナダの多元文化に深く影響を与えてきた。

カナダの民俗は原住民の民俗伝統とインディアンとエ

スキモー、そしてフランスとイギリスの侵入民族の伝統という 2 つの要素を含んでいる。2 つの民俗は別々に発展するが、ある程度相互に影響する。このような民俗研究の大部分はインディアン、エスキモー、フランス系カナダ人の民話を記録してなされ、残りは英語とゲール語の民間伝承の分野に及んでいる。カナダの主要な集団の伝統を反映したものは、1. 先住民(ネイティブインディアン、イヌイット)、2. フランス語(カナダ)、3. アングロ・カナダ(英語、アイルランド語、スコットランド、ウェールズ)、4. ほかの民族グループの 4 つの種類の民話を含んでいる。20 世紀後半以降、カナダの民間伝承は、世界中の 70 以上の異なった伝統にそのルーツを持っている。

バンクーバーは北アメリカ第 3 番目の海港都市である。日系と中国系の移民もあり、地元の伝統文化は日本文化と中国文化のような外来の異文化を融合している。例えば市中心のチャイナタウンはカナダの多元文化の代表的な要素と考えられる。チャイナタウンは、様々な世

代の中国系カナダ人、特に香港からの移民 2 世が多く、1960 年代以降カナダで行われた多文化主義制度のシンボルの 1 つである。1980 年代頃から多くの富裕な香港・台湾系移民がこのエリアに移っており、これとともに中国系の商店やレストランも増えている。



カナダの多元文化、特に先住民文化と民俗を全面的に展示するのは人類学博物館である。人類学博物館はブリティッシュコロンビア大学の中に 1949 年に設立された。この博物館の北西沿岸の先住民コレクションは非常に名高く、トーテムポールをはじめ、マスクや生活道具など圧倒的な展示数、収蔵品数を誇る。

2 和歌山県人のスティヴストンへの定住¹

カナダの多元文化を代表するもう 1 つは、スティヴストンに移民して来た日系人である。日系人の大部分は 1890 年代から 1920 年代にかけてカナダへ来て、1905 年から 1907 年にかけて頂点に達した。初期の移民は、ブリティッシュコロンビアで材木業や鉱業、漁業、農業などに従事した。1907 年にはハワイからの転航者の急増と日本からの移民が増加したため、バンクーバー暴動が起き、日本人移民の制限のためにレシュエ協定が結ばれた。新移民は年間 400 名に制限され、すでにカナダに居住している者の妻子、両親は枠外となったため、日本人移民も妻子を呼び寄せて、定住に向かうこととなった。これが反日感情を大きく刺激することになった。1928 年までには、日本移民は年間 150 名にまで制限されてしまった。

和歌山県の移民は日高郡三尾村出身の工野儀兵衛が

1888 年にカナダに渡りフレザー河に上る鮭をみて、故郷の人々を呼び寄せたことに始まると言われている。1912 年にはカナダにおける日本人人口で和歌山県人が 2 位を占めるようになる。明治 40 年代の初めには、バンクーバーやスティヴストンにはすでに各種の日本人の組織ができ、確固たる日本人社会が形成されていた。

スティヴストンの和歌山県人の独立営業者のほとんどは漁業従事者である。当時の日本人漁者はすでに熟練業であり、カナダに帰化してライセンスを取っている者も多く、缶詰会社も白人漁夫やインディアン漁夫よりも優先して使用した。日本人漁師は最初プラーから始め、やがてライセンスを取ってネットマン、そして船持ちへと発展した。漁師の大半は一生涯漁師であった者が多く、商売人に転向した者は多くはない。スティヴストンの日本人漁者の中には明治末期にはすでにガソリン船を所有する者も出てきていた。しかし大正期に入ると、塩鮭の日本への輸出、バンクーバー島での鯊漁は日本と中国への輸出を行う業者が増えてくる。この時期は和歌山県人の大半はスティヴストンを中心にして漁業をしていた時期であると言える。

今日、和歌山県の漁民の二世、三世の日系人はまだスティヴストンに残っているが、漁業に従事する人は少なくなっている。しかし、日系人がもたらした日本文化はカナダの多元文化へも影響力を失っていないと思われる。

今回は時間の制約もあり、十分な資料を収集することができなかったが、これから、研究を深めていきたい。



1 佐々木敏二、「日本人カナダ移民史」、1999.8、不二出版株式会社

戦後ドイツにおけるモンゴル学研究 ワルター・ハイシッヒとヘルマン・コンスタンの功績を追い求めて

白 莉 莉
(歴史民俗資料学研究科 博士後期課程)



2012 年 5 月 2 日から派遣研究員として 3 週間ドイツのハイデルベルク大学を訪問した。派遣研究先にドイツを選定した理由は、戦後ドイツにおける著名なモンゴル

学者ワルター・ハイシッヒ (Walter Heissig) の研究功績を追い求め、戦前モンゴル地域から収集された古い地図や写本などを調査することであった。

ワルター・ハイシッヒ (1913–2005) は、1942 年から内モンゴルの広い地域において現地調査を行い、モンゴル文献を大量に収集することに努めた。彼は、戦後のドイツにおいて約半世紀に渡ってモンゴルの歴史、文学、民間芸能などの研究に身を奉じ、大量の研究著作を執筆している。しかし、中国国内において、彼の研究は目を向けられることはなく、1989 年に中国語に翻訳された『西藏と蒙古の宗教』(1970 年) が知られているのみである。

彼の「民族は歴史を捜し求める」という原題の元にかかれた『モンゴルの歴史と文化』(1964 年) という著作は、日本の田中克彦教授によって日本語に翻訳されており、上記の 2 つの著作とも、モンゴルの宗教関係の研究に取り組んでいる筆者にとって貴重な参考文献となっていたので、ワルター・ハイシッヒの研究功績についてより多くの情報を得ることを以前から考えていた。

その考えと、ハイデルベルク大学のクラスターの研究員のアドバイスを受け、ハイデルベルクの南アジア研究所 (SAI) とハイデルベルク大学の図書館にて調査研究活動を進めることにした。この 2 つの研究所においてワルター・ハイシッヒの著作や編著を 40 冊余りに目を通すことができた。そして、その著作が書かれた時期は主に 1950 年代後半から 1980 年代の間に集中していることが確認できた。1950 年代後半の著作では、モンゴルの歴史研究が中心に行われ、14 世紀から 18 世紀までの間にモンゴルで書かれた『十善福徑白史』、『モンゴルのボルジギン氏族の歴史』などのモンゴルの年代記の写本の内容がそのまま著書のなかに翻刻され一部掲載されている。そして彼の 1970 年代以降の著作においてはモンゴル文学の研究成果が顕著にみられるようになった。そのなかでも特にモンゴルの英雄叙事詩の研究『ゲセル・ハーン (Geser Khan) 物語』や『三歳の赤英雄 (Gurban Nasutai Gunagan Ulagan Bagatur)』などの研究が見られる。

今回の調査で資料を調べているうちに、ワルター・ハイシッヒの著作でも言及されたドイツ人のモンゴル学者ヘルマン・コンスタン (Hermann Constan) の功績に触れる機会があった。ヘルマン・コンスタンはドイツ人の記者の身分を以て 1907 ～ 1913 年の間にハルハモンゴル国 (今日のモンゴル国) に滞在し、第一次世界大戦が勃発した際に一度帰国するが、その後 1930 年から 1950 年までずっと中国の北京に滞在していた。彼は当時すでに画像撮影の機械を使用し、モンゴルと北京に滞在中は大量な写真を撮影し、現在も約 3000 枚の写真は



図 1 内モンゴルオールドス市オトク地域の古地図 (<http://crossasia.org/digital/mongolische-karten>、アクセス 5 月 16 日)

個人のコレクションとして保存されていると言われている。これらの写真はまだ公開されていないため、彼が以前発表した資料の中で使ったものしか見られない。また彼は北京滞在中、清朝の末期に作られたモンゴルの各地域の手書きの地図を 182 枚も収集し、彼の没後すべてベルリンの国立図書館で保管するようになったことが報告されている。近年ようやくこれらの古地図に注目する学者たちが現れてきて、ベルリンの国立図書館は利便性を考慮して、2008 年から図書館のサイトに公開している。

これらの地図を見てみると、モンゴルの各地域によってその描き方も異なるが、基本的に山や丘、または川、湖などの地形を基準に作られており、それに王公の住処、お寺とオボーなどの場所は明示されている (図 1)。

ヨーロッパの国においてこのようにモンゴル学関係の膨大な研究功績があることは、今回の研究調査で初めて分かった。ワルター・ハイシッヒが 1950 年代の後半に作成した歴史文献の写本を使用した著作は、筆者が手に取った際には、まだ未開封の状況だった。文化大革命中に大量な文献資料が被害を受けた中国のモンゴル学研究にとって、これらの著作は将来的に貴重な参考文献になると思われる。一方、ヘルマン・コンスタンの集めた古い地図は、ベルリンの国立図書館によって公開されたことにより、今後、景観の持続と変容の視点から、モンゴル地域の地形文化に関する研究に活用できるようになることを願っている。

コラム 海外提携機関紹介.....

漢陽大学校東アジア文化研究所 Institute For East Asian Cultures, Hanyang University, Korea.

朴 賛勝（漢陽大学校東アジア文化研究所所長）

■ 沿革

本研究所は、1974年に漢陽大学校附設の「国学研究院」として出発し、1982年に「韓国学研究所」へ改称してから、2009年9月には「東アジア文化研究所」に拡大・再編した。東アジア文化研究所へ改称したのは、2008年度に漢陽大学校の特性化事業の一環で、本研究所の「東アジア文化ネットワーク研究団」が選定されたことと関係して、研究所の研究領域を東アジアの文化研究へ本格的に拡張するためであった。

■ 事業

東アジア文化研究所は、次のような事業を展開している。1) 東アジア文化と韓国文化についての研究及び教育、2) 学術誌、学術叢書、資料叢書などの刊行、3) 各種の学術会議、ゼミナール、講演会などの開催、4) 国内外の各学会、研究機関との交流・協力、5) その他、東アジア文化、韓国文化の研究に必要な事業などである。

■ 研究叢書の出版

本研究所は、「韓国学研究叢書」として、『韓国近代初期における開化思想の研究』、『18世紀における朝鮮知識人の文化意識』、『19世紀における知識人の文化地図』などを発刊した。最近では、そのタイトルを「東アジア文化研究叢書」に変えて、『旅行の発見、他者の表象』などを刊行している。また、学術誌として『韓国学論集』を発刊してきたが、2009年度からこれを『東アジア文化研究』に変えて、現在まで50集を発刊した。

■ 研究

本研究所では、2008年から4年間にかけて大学の支援を受けて、東アジア文化の交流及び比較研究のための「東アジア文化交流ネットワーク研究団」を発足し、朝鮮通信使、燕行使に関する研究、そして旅行記、漂流記、見聞録などに関する研究を進行してきた。

また、2012年には「東アジア人文学の系譜学研究団」と「東アジアの文化表象研究団」を組織した。「東アジ



ア人文学の系譜学研究団」は、10人の教授らが参加して、近代以降の東アジア三国（韓・中・日）の人文学が近代以前の東アジア人文学とどのようにつながっていたか、西洋の近代人文学が東アジアへどんな経路を通じて受容されたか、近代以降の東アジア人文学がお互いどんな関係をもって発展してきたかなどを研究する計画である。これをもって、東アジア人文学の系譜を描き、現在の東アジア人文学の地形を捉えて、未来の東アジア人文学の進むべき方向を摸索しようとする。本研究団の事業は、2012年から2016年まで5年間展開される予定であり、歴史・哲学・宗教学などの分野から様々な専攻者らが参加している。「東アジアの文化表象研究団」は、東アジア三国の文化表象の形成過程、そしてその共通点と差異点などを明らかにすることを課題としている。本研究団は、これから3年間「東アジアの民族、国家、地域文化の表象」、「東アジアの日常生活文化の表象」、「東アジアの文化芸術の表象」というテーマで、年次的に研究を進める予定である。本研究団には、13人の研究者らが参加している。

ブックレット紹介

神奈川大学 21 世紀 COE 研究成果叢書（神奈川大学評論ブックレット）

『神奈川大学評論ブックレット』のシリーズとして、『神奈川大学 21 世紀 COE 研究成果叢書』を刊行しました。本叢書は、21 世紀 COE プログラム『人類文化研究のための非文字資料の体系化』の成果を研究担当者の単著として、わかりやすく簡明にまとめたものです。

神奈川大学評論ブックレット 30 800 円＋税
菊池勇夫『菅江真澄が見たアイヌ文化』



菅江真澄自身がアイヌ文化に対してどのような関心や眼差しを持っていたのか明らかにしながら、真澄の記述と図絵によって十八世紀末頃の道南アイヌの生活文化の具体相を読み解いてみようと思う。－「はじめに」より

神奈川大学評論ブックレット 31 1000 円＋税
福田アジオ『名所図会を手にして東海道』



『東海道名所図会』が描いた各地の生活・生産場面を重点的に取り上げ、十八世紀末の東海道沿いの生活を、絵引きの方式によって生き生きと蘇らせる。

神奈川大学評論ブックレット 32 800 円＋税
中村政則『オーラル・ヒストリーの可能性－東京ゴミ戦争と美濃部都政』



文献資料（専門書、体験記、日記、新聞など）とオーラル・ヒストリーの方法を併用し、高度経済成長期の東京都におけるゴミの処理・処分に関する紛争を浮き彫りにする。

神奈川大学評論ブックレット 33 1000 円＋税
北原糸子『メディア環境の近代化－災害写真を中心に－』



明治中期、映像で災害を捉える時代が開かれた！災害の実態写真などを紹介しながら、伝え手とその受け手も含め、その時代の情報空間を考える。

書評

グレゴリー・スミッツ著・渡辺美季翻訳

『琉球王国の自画像－近世沖縄思想史』（ぺりかん社）

屋良 健一郎（東京大学大学院 博士課程）

本書は、東アジア思想史の研究者グレゴリー・スミッツ氏の1999年出版の著書Visions of Ryukyuの日本語版である。琉球史・東洋史研究者である渡辺美季氏の丁寧な翻訳によってこの興味深い研究を手軽に読めるようになったことがとても嬉しい。

「序」では、「国民国家化」以前の近世琉球に、王国のアイデンティティ（琉球像）を構築し、その琉球像のもとへ琉球人を統合しようとした為政者たちがいたことを指摘する。彼らによるアイデンティティ構築の過程と、それが琉球史に与えた影響を追究するのが本書の課題として示されている。

第1章「琉球の地位および日本・中国との関係」では議論の前提として、「日本の一部でありながら別の意味においては日本の外部」であり「中国皇帝に儀礼的・文化的に従属していた」琉球を「準・独立国」と位置付ける。「準・独立国」である琉球と日本との関係の曖昧さゆえに、琉球人自身が日本との関係性を主体的に定義することができた、とする指摘は重要である。そして、琉球人が主体的に描いた琉球像が次章以降で検討される。

第2章「北への眼差しと西への眼差し」では、薩摩の支配を受け容れた上で日本文化の習得を推進した向象賢と、それとは正反対に、琉球を中国の臣下とみなし中国文化(特に漢学)を普及させた程順則の思想が紹介される。

そして、向象賢の政治改革、程順則の漢学推進の影響を受けつつ独自の琉球像を構想した蔡温が第3章「琉球の自律性」、第4章「琉球の再興」で考察される。蔡温は、琉球の運命を決定するのは琉球人であり、儒教社会を実現することで琉球の繁栄がもたらされると考えていたという。その信念に基づき、儒教を政治に反映させ、儒教道徳とは相容れない伝統的な祭事や信仰を禁止・制限した。ここで注目すべきは、これらの禁制がうまくいっていなかったことを示す史料から、農民達が蔡温の目指す琉球像とは別の世界観をもっていたと指摘している点である。また、平敷屋朝敏の文学作品に見られる個人の欲望の充足といった特徴を、平敷屋の琉球像と捉え、自己修養に基づく階層社会を目指した蔡温の琉球像への抵抗

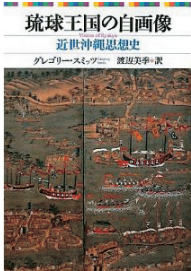
と見る点も興味深い。

第5章「蔡温の琉球像への対抗」と「エピローグ／結論」では蔡温が示した琉球像が彼の死後にどのように継承され、やがて崩壊していったのかを記述する。現代までを対象とする巨視的な視野に感銘を受けた。

本書の特徴の一つは、琉球史の展開を為政者の琉球像と他の人々の琉球像の対立と捉える視点だ。結果的には、琉球人自身が運命を決定する儒教社会という蔡温が描いた琉球像が王国の政治に最も影響を与えたわけであるが、その過程で生まれた抵抗、すなわち主流にはなれなかった他の琉球像にも言及し、排除された人々や農民の息吹をも感じさせるダイナミックな琉球史が提示された。

一つだけ気になったことを挙げると、琉球の儒教化が進む18世紀前半に、一方で王府が日本文化を積極的に受容していたことをどう考えるかという点だ。本書で触れられていない事例ではあるが、康熙52年(1713)に王府は立花や日本の書札札を得意とする者に、その技能を後継者に伝授するようにという命令を立て続けに出している（『那覇市史資料編』第1巻7、17・555・616頁）。また、「浮縄雅文集」（沖縄県立図書館所蔵）には、1741年に国王尚敬が芸能に堪能な者を集め、立花や茶道などを披露させたことが記されている。向象賢の政策も思い出されるが、儒教社会が目指される一方で王府の意向で日本文化習得の動きがあったことは、親中か親日かといった視点では必ずしも割り切れない琉球の複雑さを感じさせる。こういった動きを含めた上で蔡温の琉球像や近世琉球史がどう評価されるのか、気になるところだ。

最後となったが、本書刊行にあたって新たに記された「日本語版への序文」は著者の現時点での研究の到達点を知ることができる。注目すべきは、蔡温の献策と同様のものが、蔡温以前に中国で議論されていたという指摘であろう。東アジアと琉球王国の政治・思想面でのつながりを示すこの興味深い指摘に、著者の今後の研究への期待も高まるばかりである。



2012年度 センター研究員・研究協力者

センター研究員

名 前	所属部局	職 名	研究班
田上 繁（センター長）	歴史民俗資料科学研究科	教授	1,4
大里 浩秋（副センター長 / 運営委員＜研究会担当＞）	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	2
内田 青蔵（副センター長 / 運営委員＜国際交流担当＞）	工学研究科建築学専攻	教授	2
小熊 誠（事務局長 / 運営委員＜事務総括担当・編集担当＞）	歴史民俗資料科学研究科	教授	1B
鳥越 輝昭（運営委員 / ＜国際交流担当＞）	外国語学研究科欧米言語文化専攻	教授	1C
川島 秀一	歴史民俗資料科学研究科	特任教授	4
木下 宏揚	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	5
金 容範	非文字資料研究センター	客員研究員	2
熊谷 謙介	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1C
小松原 由理	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1C
佐野 賢治	歴史民俗資料科学研究科	教授	5
泉水 英計	経営学部国際経営学科	准教授	3
孫 安石	外国語学研究科中国言語文化専攻	教授	2
津田 良樹	工学部建築学科	助教	3
能登 正人	工学研究科電気電子情報工学専攻	准教授	5
ステファン・ブッヘンベルゲル	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1C
ジョン・ボチャラリ	歴史民俗資料科学研究科 東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻	非常勤講師 教授	1A
松澤 和光	工学研究科電気電子情報工学専攻	教授	5
宮田 純子	工学部電気電子情報工学科	特別助手	5
村井 寛志	外国語学研究科中国言語文化専攻	准教授	2
森 武磨	歴史民俗資料科学研究科	教授	4
安室 知	歴史民俗資料科学研究科	教授	4
クリスチャン・ラットクリフ	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1A
渡辺 美季	外国語学部国際文化交流学科	准教授	1B

研究協力者

稲宮 康人	写真家		3
金子 展也	(株) 日立ハイテクトレーディング		3
何 彬	首都大学東京都市教養学部都市教養学科	教授	1A
吉川 良和	外国語学部中国語学科	非常勤講師	2
君 康道	東京大学大学院総合文化研究科	講師	1A
栗原 純	東京女子大学現代教養学部	教授	2
小松 大介	豊島区立郷土資料館		5
辻子 実	日本キリスト教協議会靖国神社問題委員会	委員長	3
鈴木 一弘	高知大学自然科学学系理学部門	助教	5
徐 東千	東京大学大学院工学系研究科建築学専攻	博士後期課程	1A
田名 真之	沖縄国際大学総合文化学部	教授	1B
常光 徹	国立歴史民俗博物館	教授	4
得能 壽美	法政大学沖縄文化研究所	特別研究員	1B
富井 正憲	漢陽大学校建築大学	教授	2
富澤 達三	外国語学部国際文化交流学科	非常勤講師	1B
豊見山 和行	琉球大学教育学部	教授	1B
中井 真木	東京大学大学院総合文化研究科	博士課程	1A
藤川 美代子	歴史民俗資料科学研究科	博士後期課程	4
真栄平 房昭	神戸女学院大学文学部	教授	1B
松田 睦彦	国立歴史民俗博物館	助教	4
山本 志乃	旅の文化研究所	主任研究員	4
李 利	歴史民俗資料科学研究科	博士後期課程	1A
若宮 幸一	旧古河鉱業若松ビル	館長	4

- 研究班：1
- 生活絵引編纂共同研究
- A 『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究
- B 『日本近世生活絵引』南島編編纂共同研究
- C 『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究
- 2 東アジアの租界とメディア空間
- 3 海外神社跡地から見た景観の持続と変容
- 4 水辺の生活環境史
- 5 非文字資料の効率的な検索と安全な流通



2012年度 個人研究課題一覧

田上 繁	非文字資料としての近世検地絵図の収集と解析
大里 浩秋	戦前台湾在住日本人関係資料整理
内田 青蔵	戦前期の横浜居留地に関する非文字資料の収集と分析
小熊 誠	東シナ海海域地域における非文字資料の比較研究
鳥越 輝昭	非文字資料に見る表象史
川島 秀一	漁民の備忘録に関する民俗学的研究
木下 宏揚	非文字資料の著作権管理に関する研究
金 容範	近代朝鮮の新軍事都市の形成と観光地化 - 鎮海市の事例を中心として
熊谷 謙介	フランス視覚資料における祝祭
小松原 由理	非文字資料としてのドイツ前衛芸術の分析
佐野 賢治	民俗資料の文化資源化
泉水 英計	戦後初期沖縄における米国軍政とその広報活動
孫 安石	中国都市史研究—とくに上海を中心に
津田 良樹	民家・集落の史的研究
能登 正人	非文字情報の収集と解析
ステファン・ブッヘンベルゲル	アメリカのコミックスとミステリーの文化と歴史
ジョン・ボチャリ	絵巻と民間信仰
松澤 和光	非文字資料の検索法に関する研究
宮田 純子	非文字資料の効率的な検索法に関する研究
村井 寛志	戦後香港メディア史
森 武麿	オーラルヒストリーの可能性—戦後体験を語る—
安室 知	海浜微地形の認識と環境利用に関する研究
クリスチャン・ラットクリフ	中世における和歌の社会的価値と効用
渡辺 美季	琉球史に関わる非文字資料の収集と分析

2012年度 奨励研究者決定

研究課題	氏名（所属）
オトク地域におけるオボー-民俗 ーオボー祭祀の主宰組織の特徴およびオボーと寺院の関わりについて	白 莉莉（歴史民俗資料科学研究科博士後期課程）
スサノオ信仰とその変遷についての研究	姚 琮（歴史民俗資料科学研究科博士後期課程）
日本と西欧におけるからくり見世物文化の比較研究	坂井 美香（歴史民俗資料科学研究科博士後期課程）
チベット僧院における舞面を使った芸能比較研究	根敦 阿斯尔（歴史民俗資料科学研究科博士前期課程）
ヤオ族儀礼神画の研究	譚 静（歴史民俗資料科学研究科博士後期課程）

2012年度 派遣研究者決定（6月末現在）

氏名（所属） 派遣期間	派遣先提携研究機関名	研究課題
須崎 文代（工学研究科建築学専攻） 2012年10月19日～2012年11月7日	フランス国立高等研究院 東アジア文明研究センター	日欧における住宅用台所の近代化過程に関する研究
于 飛（外国語学研究科中国言語文化専攻） 2012年11月1日～2012年11月21日	北京師範大学文学院 民俗学与文化人類学研究所	北京の民俗芸術—毛猴（Hairy Monkey）
姚 琮（歴史民俗資料科学研究科） 2012年11月1日～2012年11月21日	ブリティッシュコロンビア大学 アジア学科	民俗学から見た日本人の祖先信仰 - スサノオ信仰を事例として

主な研究活動

運営委員会

2011 年度		
第 8 回	12 月 7 日	2011 年度予算残額の扱いについて、2011 年度事業報告書・2012 年度事業計画書の策定日程について
第 9 回	1 月 20 日	研究協力者の解嘱について、派遣研究員資格（所属大学院研究科）の拡張について、租界とメディア班「第 2 回公開研究会（上海）」について、2011 年度予算残額の扱いについて、2011 年度事業報告書（案）について、2012 年度事業計画書（案）について
第 10 回	2 月 28 日	派遣研究員の期間変更について、2011 年度研究協力者の委嘱について、2012 年度研究体制について、2012 年度研究計画の提出依頼について

2012 年度		
第 1 回	4 月 25 日	2012 年度研究員等人事について、2012 年度予算（配分）について、2012 年度海外提携機関との招聘・派遣募集要項について、2012 年度奨励研究募集要項について、『ニューズレター』No.28 の編集方針について
第 2 回	5 月 23 日	2012 年度海外提携機関への派遣募集要項および派遣計画について、2012 年度奨励研究審査について

研究員会議

2011 年度		
第 4 回	12 月 7 日	次期センター長の選出について、漢陽大学関係行事について
第 5 回	2 月 14 日	2011 年度事業報告書（案）について、2012 年度事業計画書（案）について、2012 年度研究体制について（依頼）
第 6 回	3 月 21 日	2012 年度研究員人事について
2012 年度		
第 1 回	4 月 25 日	2012 年度予算（配分）について

研究会

研究 班

『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究・研究会 3 月 14 日、5 月 9 日
『日本近世生活絵引』南島編編纂共同研究・研究会 1 月 31 日、2 月 21 日、3 月 28 日
『ヨーロッパ近代生活絵引』編纂共同研究・研究会 5 月 16 日
東アジアの租界とメディア空間・研究会 1 月 18 日
海外神社跡地から見た景観の持続と変容・研究会 5 月 26 日

現地調査

調査テーマ	日程	場所	調査メンバー
水辺の生活環境史	12 月 24 日～26 日	高知	安室知、常光徹、山本志乃
東アジアの租界とメディア空間	2 月 24 日～27 日	中国（上海）	大里浩秋、孫安石、村井寛志、内田青蔵
海外神社跡地から見た景観の持続と変容	3 月 6 日～11 日	中国（長春他）	橘川俊忠、津田良樹、馬興国

編集後記

今号は、44 頁と過去最多の分量となりました。昨年度の公開展示と公開研究会の紹介が加わり、さらに招聘と派遣研究員によるレポートが12本とこれも過去最高になっています。これは、非文字資料研究センターの国際交流が盛んになってきたという証左だと思います。ただ、派遣研究員に日本人院生が少ないことが気になります。最近内向きの日本人が問題視されています。とくに、若い日本人院生が積極的に海外に出ていって研究を発展させてくれることを期待しています。韓国の漢陽大学校東アジア文化研究所と本研究センターと

の学術協定締結を記念して開催された公開展示「京城の巡礼」は、戦前の日本植民地時代の京城が写真と映像で表現され、また富井正憲先生をはじめとするソウル近代都市建築研究会によって街並みの復元が行われ、大変興味深い展示でした。これぞまさに非文字資料研究であるという主張が感じられました。その関連で、今号の表紙は、『異邦人の瞬間捕捉、京城1930』展示会図録から京城の写真を使わせていただきました。記して謝意を表します。（M.O）

神奈川大学国際常民文化研究機構 第4回 国際シンポジウム 「二つのミンゾク学—多文化共生のための人類文化研究—」

日時：Ⅰ部 2012年12月8日(土) 10:00～17:00
Ⅱ部 2012年12月9日(日) 10:00～17:00
場所：Ⅰ部 神奈川大学横浜キャンパス16号館セレストホール
Ⅱ部 神奈川大学横浜キャンパス16号館視聴覚ホールB

第1日目：Ⅰ 国際シンポジウム

「民族の交錯—多文化社会に生きる—」

基 調 講 演：ハルミ・ベフ (スタンフォード大学)
パネル報告：森幸一 (サンパウロ大学) 中川裕 (千葉大学)
陳天璽 (国立民族学博物館) 尹健次 (神奈川大学)
工藤正子 (京都女子大学) 森茂岳雄 (中央大学)

第2日目：Ⅱ 「第二次大戦中および占領期の民族学・文化人類学」公開研究会

「ミンゾク研究の光と影—近代日本の異文化体験と学知—」

研究発表：中勝勝美 (桜美林大学) 清水昭俊 (神奈川大学)
全京秀 (ソウル大学) 菊池暁 (京都大学人文科学研究所)
木名瀬高嗣 (東京理科大学) 谷口陽子 (専修大学)
王京 (北京大学)
コメント：坂野徹 (日本大学) 重信幸彦 (国立民族学博物館)
全京秀 (ソウル大学) 三浦啓二 (外務省)

主催：神奈川大学国際常民文化研究機構・神奈川大学日本常民文化研究所

※上記の内容は変更することがあります。

お問い合わせは、神奈川大学国際常民文化研究機構
TEL: 045-481-5661 (代表) 内線6111～6113

第16回常民文化研究講座 大津波と集落—東北大震災と三陸大海嘯 集落に受け継がれるもの

日時：2012年11月10日(土) 13:00～17:10
場所：神奈川大学横浜キャンパス2号館地下演習室
内容：

三陸沿岸津波と集落復興の歴史と課題 月舘敏栄
津波被災者が帰ろうとする海の領域意識—気仙沼市唐桑町
舞根地区の集団移転をめぐって— 植田今日子
防潮堤と移転集落—釜石市唐丹本郷— 川島秀一
集落から見た津波被災と復興 重村 力

主催：神奈川大学日本常民文化研究所

※タイトル、登壇者は変更することがあります。

お問い合わせは、日本常民文化研究所
TEL 045-481-5661 内線 4358

神奈川大学歴民調査報告第13集 佐島の民俗—神奈川県横須賀市佐島—

2012年3月20日発行 A4判129頁
発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
内容：三浦半島の海付きの村である神奈川県横須賀市佐島において、2010・2011年度におこなった民俗資料調査実習の報告。これまで同地では1970年・1990年と約20年おきに2度の民俗誌が刊行されているが、本報告はさらに20年後の2010年に時間軸を設定することで、民俗の変貌を描き出すことを意図している。

非文字研究者の新刊紹介

※内容につきましては、目次より抜粋して紹介しました。

日本歴史災害事典

北原糸子(編)・木村玲欧(編)・松浦律子(編)
2012年6月11日発行
発行：吉川弘文館
価格：15,750円
内容：特集 東日本大震災
1 災害
2 災害と現代社会
3 災害の歴史
4 歴史災害
災害基本用語



津波のまちに生きて

川島秀一(著)
2012年4月28日発行
発行：富山房インターナショナル
価格：1,890円
内容：
序 流されたものたちへ
1 津波をめぐる生活文化
2 三陸沿岸の生活文化



近世琉球と中日関係

渡辺美季(著)
2012年5月17日発行
発行：吉川弘文館
価格：10,500円
内容：
研究の動向と関心の所在
第1部 狭間の形成(琉球人が倭人か・琉球侵攻と日明関係・近世琉球と明清交替)
第2部 狭間の運営(中日の支配秩序と近世琉球・近世琉球における漂着民の船隻・積荷の処置の実態・近世琉球と「日本の国境」・清に対する琉日関係の隠蔽と漂着問題)
第3部 狭間の思想(近世琉球の自意識)
近世琉球と中日関係



お屋敷散歩

内田青蔵(著)・小野吉彦(写真)
2011年11月22日発行
発行：河出書房新社
価格：1,785円
内容：
第1章 和風系の住まい
第2章 洋風系の住まい
第3章 モダン系系の住まい



非文字資料研究 No.28

発行日 2012年7月25日発行

編集・発行 神奈川大学 非文字資料研究センター

日本常民文化研究所
Research Center for Nonwritten Cultural Materials,
Institute for the Study of Japanese Folk Culture, Kanagawa University
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

■Tel.045-481-5661 ■Fax.045-491-0659 ■URL <http://himoji.kanagawa-u.ac.jp/>

